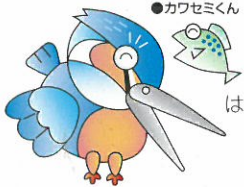


「麻機遊水地の自然」冊子キャラクター
●カワセミくん

麻あさ機はた

ゆうすいち しぜん

遊水地の自然



はじめに

あさはたもくてきゆうすいち ともえがわりゆういきそうごうちすいたいさくじぎょう ちすい
麻機多目的遊水地は、巴川流域総合治水対策事業の柱の1つとして、県施行の治水(河川)事業と静岡市施行の緑地(公園)事業を導入し、5つの工区に分けて整備を進めています。各工区の名前は、静岡北部土地改良事業(昭和38年度～48年度)の工区名を受け継いだもので、昭和50年度に第4工区、昭和53年度に第3工区に着手し、現在は第1工区の遊水地整備を進めています。

遊水地では、工事により田畑が掘り起こされ、土中に埋もれていた種子(シードバンク)の中から湿原生の植物が蘇るとともに、昆虫、野鳥、魚、両生類などの生物も戻ってきています。

また、地域活動や環境教育などを通して多くの人々が集うようになり、平成16年1月には県民公募の巴川流域麻機遊水地自然再生協議会が発足しました。この協議会では、「生命にぎわわ(環・和・輪)の湿地麻機」をスローガンに将来にわたり安定した人と生きものの共生を目指し、自然再生の議論が進められており、当遊水地を舞台に人々の輪がますます広がろうとしています。

本冊子は「特定非営利活動法人 麻機湿原を保全する会」との協働により「麻機遊水地の自然シリーズ」の第4弾(巴川の魚類)として発行しました。既刊の「シリーズ①野鳥」「シリーズ②植物」「シリーズ③昆虫」「麻機遊水地に蘇る生きものたち」ともども活用していただき、遊水地に対する関心を深めていただければ幸いです。

平成19年3月

静岡県静岡土木事務所
所長 山崎 省一

巴川流域総合治水対策事業のご紹介

巴川総合治水対策事業は、昭和49年(1974年)7月に発生した七夕豪雨の災害を契機に始められた流域全体で治水対策に取り組む事業です。この事業は、巴川本川の改修、大谷川放水路の建設、多目的遊水地(麻機遊水地、大内遊水地)の整備、流域内の学校・公園など公共施設への雨水貯留施設の整備が主な事業内容ですが、その他に水田の盛土規制や事業所は雨水を敷地内から川に流さないような構造の建物にするなど、行政だけでなく地域と協力して水害に強いまちづくりに取り組んでいます。総合治水対策事業が進むのに従い、流域での浸水被害も減少してきました。

麻機多目的遊水地は、もともと低地であった地理的条件を生かして、巴川が洪水の時には越流堤(堤防を低くした所)から洪水を引き込み、巴川の洪水を調節します。また、普段は公園として利用していただける多目的な施設です。平成16年10月に遊水地第3工区が完成し、5年に1度の発生が予想される降雨に対する安全性を確保しました。今後、さらに安全、安心して暮らしていけるまちを目指して、残る遊水地(1、2、5工区)の整備等を進めていきます。

目次

はじめに

- ・ 巴川とつながる川、池、沼 2
 - ・ 巴川水系全体図 3
- ・ 川のかたち 4
- ・ 魚のかたち 7
- ・ 魚の成長と名前 9
- ・ 巴川の水生生物 10
- ・ 静岡県の淡水魚の区分 11
 - ・ 巴川の淡水魚の生活環による区分 12
- ・ 上流域のさかなたち 13
- ・ 中流域のさかなたち 19
- ・ 下流域のさかなたち 27
- ・ 小川のさかなたち 41
- ・ 池沼・遊水地のさかなたち 47
- ・ 河口のさかなたち 55
- ・ 巴川水系の魚とその生息場所 67
- ・ 魚類名索引 71

凡例

- ・ この冊子は、麻機遊水地および麻機遊水地の属する巴川水系の巴川と大沢川、長尾川、吉田川、浅畑川などの支流ならびに大谷川放水路に見られる魚類および甲殻類・貝類のうちおよそ80種について写真や図を添えて紹介したものです。
- ・ 川や池沼の環境と淡水魚類についての簡単な説明につづいて淡水魚類、エビ・カニ類、貝類のそれぞれの種について解説しています。
- ・ わかりやすい解説に加え、専門用語や読みの難しいと思われる漢字にはふりがなを振るなど、小学生やこういうガイドブックを初めて手にする方にも活用していただける内容となるよう編集しました。
- ・ 掲載した写真のうち、一部の生物については巴川水系以外で撮影したものを使用しました。
- ・ 主に種名を表示した個所で「写真・(人名)」とあるのは写真提供者を示したものです。

巴川とつながる川、池、沼

巴川水系の本流である巴川は、文殊岳へつづく低山の山麓から流れ出てすぐに平地の流れとなり、麻機から清水港までのかつては入江だった低湿地帯を蛇行を繰り返しながら流れる川でした。しかし明治の時代から改修が始まり、蛇行が失われていきました。現在の巴川にはかつて大蛇行を繰り返したおかげはほとんど残されていません。

巴川が流れ下るうちに周囲の山から発して流れ下ってくる浅畑川、吉田川、草薙川、長尾川、塩田川、四方沢川、山原川、大沢川、常念川などが合います。これら支流と巴川との合流点には小さな扇状地が形成され、川水はしだいに伏流していきます。その最たるものは長尾川で、巴川との合流点近くなると川水は少なくなり、やがてかれてしまいます。この川が巴川とつながるのは雨の多い時期に限られます。

麻機地区を過ぎて南流する巴川が北東に向きを変える古庄からは、大谷川放水路が派川として分かれ南流します。この放水路はかつては独立した河川であった大谷川の流路をもとに拡幅したものです。これにより以前は巴川に流れ込んでいた後久川や大慈悲院川は流れを変えられて、この放水路の支流となったのです。

巴川のいくつかの支流には、これをせき止めて農業用水とするため池も見られます。山原川や大沢川ならびにそれらの支流には山原堤、上原堤、船越堤など「堤」の名をもつもののほか、有東坂池、山田池など「池」の名をもつものもあります（船越堤は夫池・婦池に分かれます）。

自然の池もあります。瀬名の弁天池は湧水の池で、かつてはわき水の量も多く、池水もたいへん清く冷たいものでした。周囲の開発が進み、わき水も減ってしまいました。現在は掘削され整備されているあたりにも、かつては浅畑沼とよばれる大きな沼がありましたが、巴川の改修とともに干拓されていたんは農地となりました。昭和49年（1974年）のいわゆる七夕豪雨の被害のあと、見直されて再び湿地に戻されることになりました。その事業はまだ続いています。完成のあかつきには広大な湿地が出現することになるでしょう。

巴川水系全体図

平成 15年 10月 撮影



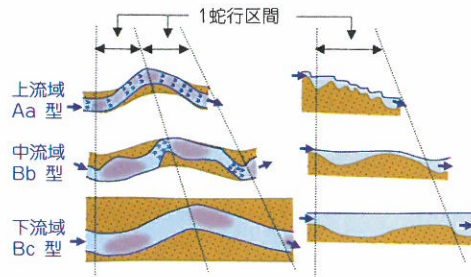
地図には、この小冊子によく出てくる河川名などを示しました。（●印：堤や池）

川のかたち

陸にある河川や水路、湖・池・沼をあわせて陸水（りくすい）といいます。この小冊子では、^{ともえがわ}巴川やその支流、^{おおやがわぼうすいろ}大谷川放水路、泉から流れ出る小川、水田わきの水路および遊水地やため池などこれら陸水のほとんどを対象としています。

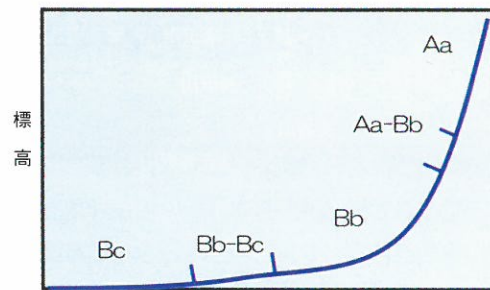
川はその中でも源流から海に流れ出るまでの間、とくに大きく姿を変えますから、この変化について説明しておくことにします。

^{げんりゅう}源流の流れは細く、しかし急で蛇行も小さく短いです。そして流れ下るうちに別の^{さわ}沢の水を合わせて流れは大きくなり、蛇行も大きく長くなります。やがて平野部に出ると流れはゆるくなり、さらに大きな蛇行を見せるようになります。



川の蛇行と瀬と淵の分布

川の流れかたは実は一様ではありません。^{いちよう}流れは流れの速い瀬（せ）とゆるやかな淵（ふち）とでできているのです。川の蛇行の形とこの瀬と淵のあり方は組みになっていて、それを図式化したのが右上の図です。そして川の蛇行部をひとつの構成単位と考え、その中で瀬と淵が2組以上あるA型と1組のB型に分けます。また瀬から淵への流れ込みのようすについて、滝のように流れ落ちるa型、^{しらなみ}白波を立てて流れ込むb型および白波はなく波立つだけのc型を区別します。そして蛇行の形と瀬の形を組み合わせると実際の川の流れを見てみると、基本的には3つしかなく、Aa、BbおよびBcとなり、これらは川の上、中、下流に配置されています。



流程と河川形態

※典型的な河川では、Aa型は上流に、Bb型は中流に、Bc型は下流にみられる。

この区分は提案者の名により^{かに}可児の河川形態といいます。この小冊子でも川の景観のことを指すのに上流域、中流域、下流域という用語をもちいていますが、おおよそこのAa、Bb、Bc型の河川形態と対応しています。

巴川は、かつては自然の蛇行を繰り返す川で、とくに下流部が大きな蛇行を繰り返すことで巴川の名があり、またその曲がりがありすぎるので九十九曲川という呼び名もありました。しかし流域に暮らす人々の生活の営みの中で繰り返し改修され、現在のような曲がりが少ない形になったのです。



巴川河口 写真・板井



巴川下流域（千歳橋） 写真・鈴木



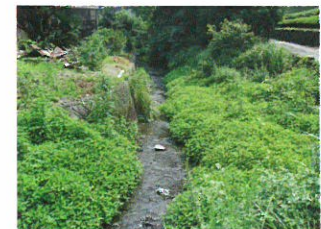
巴川下流域（能島） 写真・板井



巴川下流域（流通大橋） 写真・板井



巴川中流域（有永） 写真・板井



巴川上流域（北） 写真・板井

魚のかたち



長尾川中流域（瀬名新田）
写真・鈴木



大沢川中流域（追分）
写真・板井



長尾川上流域（平山）
写真・鈴木



吉田川上流域（平沢）
写真・板井



山原川上流域（山原）
写真・板井



浅畑川源流水路（北沼上）
写真・板井



大谷川放水路（西大谷）
写真・板井



麻機遊水地（野丈）
写真・鈴木

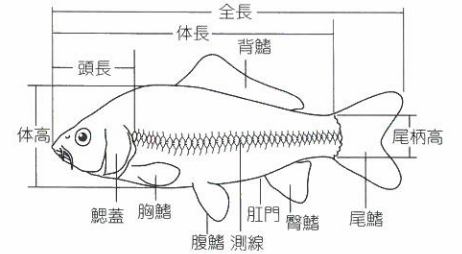
水の中に生きる生きものたちは水およびその他の特殊な環境条件に適した体の作りをもっています。ここでは魚類だけについて述べますが、甲殻類（こうかくるい：エビ・カニ類のこと）や貝類などについてはそれぞれの専門の解説書を見てください。

魚の体は3つの部分に区別できます。頭から鰓蓋（えらぶた）の末端までを頭部、そこからおおよそ肛門（こうもん）までを胴部、それより後を尾部といいます。

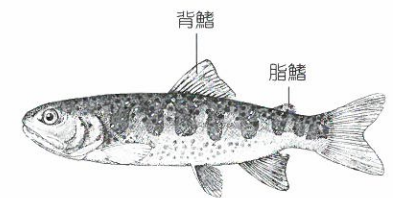
右の図に魚類の各部位や計測位置を示しました。魚類は左側に頭を置き、腹側を手前に置いた状態で見るのが一般的です。魚の大きさは頭の前から、尾鰭（おびれ）の先（実際は尾鰭をつぼめて最も伸びるところまで）までを全長といい、尾鰭の基部の脊椎骨（せきついこつ）の末端までを体長といいます。本書では魚の大きさはすべて体長で示しています。

魚には鱗（ひれ）があり、その種類や数、各鱗を構成する棘（とげ：固く枝分かれしていない）や軟条（なんじょう：軟らかく枝分かれしている）の数は、魚の種類を特定する上での重要な形質のひとつです。

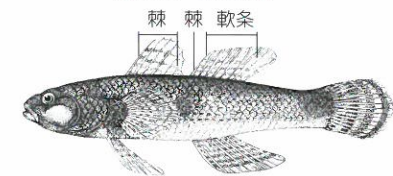
一般に魚には背中に背鰭（せびれ）、尾に尾鰭（おびれ）、胸に胸鰭（むなびれ）、腹に腹鰭およびその後方に臀鰭（しりびれ：解説では尻びれと表記）がついています。このうち胸鰭と腹鰭は一般に左右1対あり、他の鱗はそれぞれ1



魚類の各部位と計測位置



第1背鰭 第2背鰭



魚類の背中の鱗（ひれ）

枚です。

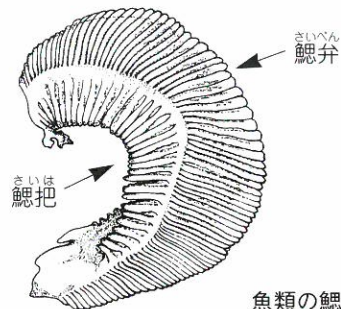
ただし、前頁右下の図に示したように、脂鱗（あぶらびれ）という棘や条のない鱗をもつものがあったり、背鱗も前後2つに分かれていたりするものもあります。また、腹鱗がなかったり（ウナギ）、胸鱗が合わさって吸盤きゅうばんになっている（ハゼ類）ような特殊化した魚もいます。

大多数の魚の体は鱗（うろこ）でおおわれますが、ハゼ類の一部やアユカケなどカジカ類には鱗がありません。ウナギやドジョウは、一見鱗がないように見えても実際には細かい鱗があります。またたいていの魚には体側たいそくに沿って穴の開いた鱗がありますが、これは側線（そくせん）と呼ばれる感覚器官の開口部です。感覚器官は頭部にもあり、その分布はカワアナゴ類のように種類を決定する決め手となることもあります。

魚にはさまざまな体色があり、オスとメス、成魚と幼魚とで色彩が違ふこともまれではありません。とくに繁殖期に特有の色彩を示すものがあります。これを婚姻色（こんいんしょく）と言っています。またオイカワやモツゴなどのように婚姻色に彩られた繁殖期の雄では、頭部などに白色の突起ができ、これを追星（おいぼし）と言っています。

体のもようのうち、頭から尾までの縦軸に沿う線状のもよう、太いものを縦帯（じゅうたい）、細いものを縦条（じゅうじょう）と言います。また短いものは斑紋（はんもん）といい、縦軸に長いものを縦斑（じゅうはん）、背から腹方向のものを横斑（おうはん）と言います。ごく小さいものは斑点（はんてん）です。

魚の呼吸は鰓（えら）によって行いますが、鰓は頭部の鰓蓋（えらぶた）をめくると、のぞくことができます。ひとつの鰓は弓状に曲っており、外側の赤い部分を鰓弁（さいべん）、内側の白い部分を鰓把（さいは）と言います。鰓弁はガス交換をするところ、鰓把は食物をこし取るところです。



魚類の鰓（えら）

魚の成長と名前

生きものは生まれてからおとなになるまでの間に発育し、成長します。成長とは、たんに体が大きくなること、発育とはさらに形の変化もともなうときに使います。魚は生まれてからおとなになるまでに次のような発育の段階を過ごします。

各段階では魚の種類ごとに決まった形態をもち、決まった生態を示します。その一覧を下に示しておきました。卵からかえり、仔魚（しぎょ）、稚魚（ちぎょ）と生長していくわけですが、ウナギなどのように卵からふ化したあと、レプトケファルス幼生と呼ばれるごく未熟な段階を過ごしてから変態して、稚魚段階にあたる幼ウナギとなるものもあります。カダヤシのように卵を産まず、交尾して仔魚（しぎょ）を産むことを卵胎生（らんたいせい）と言います。

- ・ 仔魚期：卵からふ化したあとすべての鱗（ひれ）が完成するまで
 - 前期仔魚期：ふ化後から卵黄がなくなるまで
 - 後期仔魚期：卵黄がなくなってから鱗が完成するまで
- ・ 稚魚期：鱗が完成してから鱗（うろこ）が完成するまで
- ・ 未成魚期：鱗ができてから最初の成熟を迎えるまで
- ・ 成魚期：最初の繁殖以後、繁殖能力をもっているあいだ
- ・ 老魚期：生活能力・繁殖能力がおとろえた時期

魚の名前についてですが、鮎（あゆ）という魚を生物学的に表現するときにはアユと書きます。カタカナで書くのは日本の共通の呼び名である標準和名であることを示します。世界共通の言葉としてはラテン語によって *Plecoglossus altivelis altivelis* とつづります。これを学名と言います。アユは静岡では古くから「アイ」と呼ぶ人が多かったようで、この呼び方は地方名（方言）となります。また「ハヤ」の呼び名は静岡県の内外でオイカワという魚のことを指しますが、この魚がいない地域ではアブラハヤのような魚を指すことが多いようです。オイカワはまた雌雄で形や色彩がちがい、成長し婚姻色があらわれた雄魚に対してはとくに「ジンジパヤ」の名もあります。

また地方名では、スズキやボラのように成長とともに呼び名が変わる魚も少なくありません。このような魚を出世魚（しゅっせうお）と呼んでいます。たとえばボラではキラ・キララ、スバシリ、ニサイ、イナ、ボラなどと変わります。

巴川の水生生物

川や湖沼にすむ生物には魚類、エビ・カニ類、貝類などのほか、サギ類やカモ類などの水鳥類、カメなどは虫類、カエルやイモリなどの両生類、水生昆虫類など多くの動物群のほか、ヨシやガマ、エビモやオオカナダモなどの水生植物などがあります。これらの水生生物は、水というごく特殊な生活場所に多くの分類群にわたる生物がかかわり合いながらすんでいますから、研究者が調べる際にもいくつかの分類群にわたる生物が同時に観察され採集されます。この小冊子では魚類、エビ・カニ類、貝類に限って述べることにしますが、すでに植物、鳥、昆虫についてはこの遊水地の小冊子のシリーズとして出版されていますので、自然観察を行う際には、ぜひそれらも一緒に参考にしてください。



魚種が多い巴川の下流域（水際に水生植物が茂る：流通大橋付近） 写真・板井

静岡県の淡水魚の区分

淡水魚とは川や湖および池沼といった陸水域（りくすいいき）でみられる魚がいい、すみ場となる淡水域への依存度によって生態的に区分することができます。その依存度は逆に海への依存度でもあるわけですが、魚が生まれてから死ぬまで（これを生活環（せいかつかん）といいます）のすべての期間を通じて、この海への依存度で分けるとつぎのようになります。

一つは、オイカワ、コイ、フナ類やメダカなどのように一生を通じて海と関わりをもたず淡水域だけで過ごすもので、純淡水魚（じゅんたんすいぎょ）といます。これにはアマゴやカワヨシノボリなどの、仲間の一部または祖先にあたる種が海と関わりをもっている陸封魚（りくふうぎょ）も含めます。

二つ目は、ウナギ、アユ、シマヨシノボリなどのように一生のうち一度は川と海の間を行き来する魚で、通し回遊魚（とおしかいゆうぎょ）といます。これらはさらに、ウナギ、アユカケ（カマキリともいいます）のように幼期に海から川に入って川で育ち、成熟すると川を降りて海で産卵する降河回遊魚（こうかかいゆうぎょ）、シロウオのように一生のほとんどを海で過ごし、産卵のためだけに川に帰ってくる溯河回遊魚（そかかいゆうぎょ）、アユ、シマヨシノボリやヌマチチブなど多くのハゼ科魚類のように川で産まれてすぐに海に下って幼時の一時を海で過ごし、再び川に入って川で育ちそこで産卵する両側回遊魚（りょうそくかいゆうぎょ）とに細かく区分することもできます。

三つ目は、ボラ、スズキやマハゼなど本来河口近くの汽水域（きすいいき）や海で生活し、おもに幼期に一時川に入る魚で、周縁魚（しゅうえんぎょ）といます。これらもさらに細かく区分することもあります。次ページの表を見ていただくことにして説明は省きます。

なお淡水魚類は、地域に昔から生息していた在来魚（天然分布魚）と近年に人為的に持ち込まれた外来魚（移入魚）との区別をしなければなりません。表にはそれも示しておきましたが、外来魚には外国原産（外来魚）のものと日本の他の地域に産するもの（内地産移入魚）の両方を含みます。

巴川の淡水魚の生活環による区分

生活環型の名称は略称で示します。〈 〉の魚は現在未記録ですが、生息する可能性の高いものです。()内の魚は天然分布地内への移殖のあるものです。

純淡水魚	在来種	オイカワ、アブラハヤ、タカハヤ、モツゴ、コイ、ギンブナ、ドジョウ、シマドジョウ、ホトケドジョウ、ナマズ、メダカ	
	外来種	カワムツ、ヌマムツ、カワバタモロコ、ソウギョ、タモロコ、カマツカ、(コイ)、キングョ、キンブナ、ゲンゴロウブナ、タイリクバラタナゴ、スジシマドジョウの一種、(メダカ)、カダヤシ、カムルチー	
水封魚	I	在来種	カワヨシノボリ
		外来種	オオクチバス、ブルーギル
	II	在来種	アマゴ、トウヨシノボリ池沼型
		外来種	ニジマス、(アマゴ)
通し回遊魚	両側回遊魚	アユ、カワアナゴ、オカメハゼ、チチブモドキ、テンジクカワアナゴ、クロミナミハゼ、ゴクラクハゼ、シマヨシノボリ、オオヨシノボリ、チチブ、ヌマチチブ、ウキゴリ、スミウキゴリ、ボウズハゼ	
	溯河回遊魚	I型	〈シロウオ〉
		II型	
		III型	ウグイ(回遊型)
降河回遊魚	ウナギ、アユカケ		
周縁魚	汽水魚	アベハゼ	
	広塩性周縁魚	イセゴイ、ガンテンイシヨウジ、カワヨウジ、ボラ、サツキハゼ、ヒメハゼ、ヒナハゼ、アカオビシマハゼ、ウロハゼ、マハゼ、アシシロハゼ、ミミズハゼ、チワラスボ	
	偶来魚	コノシロ、サツバ、マアナゴ、ゴンズイ、セスジボラ、メナダ、コボラ、スズキ、ギンガメアジ、ヒイラギ、シマイサキ、コトヒキ、クロダイ、キチヌ、メジナ、ダイナンギンボ、イダテンギンボ、ナベカ、ネズミゴチ、クロコハゼ、タネハゼ、クモハゼ、ハオコゼ、クサフグ	

上流域のさかなたち



長尾川の上流域(平山) 写真・鈴木

巴川の流域には高い山はあまりありません。本流や多くの支流は低山から流れ出ています。しかし標高1,000mをこえる竜爪山^{りゅうそうざん}を水源とする長尾川には落ち込み^{ふち}淵^{さんかん}が続く典型的な山間の流れが見られます。こういった^{けいりゅう}溪流にはアマゴなど低水温に適した魚などをはじめとして上流域の環境に適した魚類が生息します。海から^{せじょう}溯上してきた魚も生息します。

ここではアマゴ、タカハヤ、オオヨシノボリ、カワヨシノボリの魚類、ヌマエビ、サワガニ、カワニナが紹介されています。

※カワムツは「中流域のさかなたち」、ホトケドジョウは「小川のさかなたち」をごらんください。



アマゴ

(長尾川産/写真・板井)

成長したものは体長20cmをこえる陸封性のサケ科の純淡水魚です。背びれと尾びれのあいだに脂びれという小さなひれがあり、体側には朱色の小斑点がちらばり、楕円形の暗色の斑紋が9つほどならんでいます。この斑紋はサケ科魚類の幼魚（パー）の特徴でパーマークと呼ばれています。成魚型は降海して大きくなるサツキマスですが、巴川水系ではこれは知られていません。アマゴは川の上流の冷水域に生息し水生昆虫や落下昆虫などを食べています。釣り魚となり、食べてもきわめておいしい魚です。

巴川水系では現在、長尾川、吉田川に生息していますが、山原川にも記録があります。これらのうち長尾川以外のものはあとから移殖されたものでしょう。



タカハヤ

(清水区波多打川産/写真・板井)

アブラハヤによく似た体長10cmほどのコイ科の魚です。鱗はやや少なく、尾柄は太くて尾びれの付け根の黒色の斑点は色がうすく上下に広がったもようになっています。また暗色の小斑点が体側のほぼ全体に広がっていて、これらはアブラハヤとの区別点となっています。タカハヤは山地溪流のおもに淵や川岸に生息し、水生昆虫や付着藻類などを雑食して生活しています。アブラハヤと共存する川では、すみわけて上流側にすみ、また混生域では淵にいます。生息密度の高い魚なのですが、あまり食用にされていません。

巴川水系では本支流のほぼ全河川の上流域に生息しています。ただし、完全にコンクリート水路化したところではいなくなったところもあります。

オオヨシノボリ

(清水区庵原川産/写真・秋山)



ヨシノボリ類としては最大で体長8cmになります。回遊性の魚では最も上流までさかのぼる魚のひとつです。胸びれの基部の菱形の黒色斑紋と尾びれの基部の縦長の黒色斑紋が他のヨシノボリ類と区別する特徴となります。腹部は黄色です。上流域の早瀬や淵頭などの急流に生息し、水生昆虫や付着藻類を雑食しています。溯上能力は大きく、コンクリートダムの上流側の垂直なかべを溯上しているのを見ることがあります。ルリヨシノボリはオオヨシノボリとほぼ同長で、ほおと体側に鮮やかな、るり色の斑点がちらばり、尾びれには太い八字状の黒色紋があるのが特徴です。生息場所・生態もほぼ同じです。

オオヨシノボリは巴川の本流や各支流の上流域にほぼもれなく生息し、数も少なくありません。ルリヨシノボリは山原川などでまれに見つがっているだけです。

カワヨシノボリ

(吉田川産/写真・板井)



体長5cmほどの小型のハゼ科の陸封性純淡水魚です。ほおに暗色の小さい斑点があり、雄の尾びれにオレンジ色の斑紋があります。川の中流域から上流域にかけてのやや流れのゆるいところで水生昆虫などを食べて生活しています。他の多くのハゼとちがい、大きな卵から稚魚として生まれるので、海に降りず川だけで一生を過ごします。この魚は静岡県の富士川を東の端としてそれより西の日本列島に広く分布しています。関西地方のゴリの佃煮の材料で、石ごと網にみちびく荒っぽい川での捕り方が「ゴリ押し」の言葉のもととされています。

巴川水系では吉田川と長尾川の2つの支流で生息が確認されています。しかし低山を源流とする巴川本流、山原川や塩田川にも生息環境があります。これらの川での不在はおそらく過去の災害が関係したのではないかと考えられます。

オオヨシノボリとの出会い



吉田川のオオヨシノボリ（標本）
写真・板井

これまでさほど強く興味を持つことはありませんでした。

そんな私の「ヨシノボリ観」を大きくくつがえすきっかけになったのが、巴川の上流でのオオヨシノボリとの出会いです。ヨシノボリといえば、学生生活で静岡に住むまで、トウヨシノボリという丸っこいヨシノボリしか見たことも採集したこともなかった私にとって、大きな岩の転がった急流の中にすみ、スラリとしたプロポーションを持ち、独特の深緑あずきいろと小豆色のしまもようを頭にまとったこのオオヨシノボリは、「かわいらしい魚」というそれまでのヨシノボリに対するイメージを大きく変え、洗練された「カッコいい魚」という印象を私に与えてくれました。

また同時に、この魚のような生息環境に適した体型に進化してきた淡水魚に対し、強い興味を持つようになったのです。このオオヨシノボリとの出会い以来、まだ見たことのない地域のさまざまなタイプのヨシノボリを採集し、観察することも私の大きな楽しみとなっています。

寄稿・脇谷量士郎（静岡大学理学部生）



ヌマエビ

（清水区興津川産／写真・板井）

体長4cm未満のヌマエビ科の小型のエビです。川の下流域から上流域、沼地まで広く生息します。近縁種きんえんしゆにヌカエビがありますが、ヌマエビでは額角がっかく（ひたいにある角状の突起）の上縁じょうえんにあるとげが眼よりも後にもありますが、ヌカエビには眼より前にしかないので区別されます。ヌマエビは一般的に水生植物が茂っている場所に多く見られます。

ヌマエビは静岡県に広く分布していますが、巴川水系では支流の塩田川の上流域から確認されているだけです。ヌカエビはいまのところ巴川水系からは見つかりません。



サワガニ

（吉田川産／写真・板井）

甲らの幅が3cmほどのサワガニ科のカニで、一生を淡水中で過ごします。雌ガニの腹部で稚ガニとしてかえり、そのまましばらく母ガニの腹部についたあと離れます。山あいの沢、水路や湿地にいて、石や落ち葉の下に隠れていることが多く、暗くなってから盛んに行動します。唐揚げなどにするとおいしいのですが、サワガニが少なくなった近年は食べる人も少なくなりました。

巴川水系のたいていの河川の中流域から上流域に広く生息し、水のきれいな小川や水路にもいます。





カワナ

(麻機地区小流産/写真・安藤)

殻からの長さが大きいもので5cmほどになるカワナ科の巻貝です。川の上流域から中流域、平地の小川や水路に生息しています。殻はとがっていますが、大きいものの多くは先の部分が欠けています。卵は産まず、交尾して子貝を生みます。水草や落葉、石の上につく微小な藻類そうるいなどを大食します。ホタルの幼虫はこの貝を食物とするので、ホタルを育てるためにこの貝を他の川からあるいは購入して移殖することも行われますが、何よりもカワナが多く育つことのできる環境に改善することが大切です。

巴川水系でも本・支流のたいていの川の上流域や山すその小川でふつうに見られます。

カジカは絶滅したのか

巴川の魚調査をしているときに地場で「カジカ」と呼んでいる魚をしばしば耳にしました。カジカという標準和名をもつ魚はカジカ科に属し、川の上流域にアマゴなどともすんでいます。静岡県下では安倍川や興津川をはじめ各地にいることがわかっていて、巴川水系の中では長尾川がもっとも奥の深い川ですので、この川の上流域での生息が期待されるのです。

もう20年以上前のことですが、上流ひらやまの平山付近で詳しくカジカ探しをしましたが見つかりませんでした。平山の茶店のご主人から聞き取りをしますと、やはりカジカという魚はいたとのことでした。ただ持参した図鑑の写真とは必ずしも一致しなかったようです。静岡ではヨシノボリ類もカジカということがあり、カジカはオオヨシノボリなどを指すこともあるのです。長尾川のカジカはそれなのでしょうか。それともかつてはカジカが生息し、今は絶滅してしまったのでしょうか。



葵区安倍川産のカジカ (写真・安藤)

中流域のさかなたち

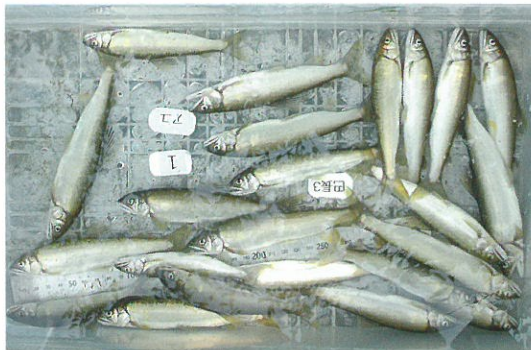


長尾川中流域(瀬名新田) 写真・鈴木

川が山あいから平地に出たばかりのところからは、川の流れはゆったりとした蛇行だこうを繰り返すようになります。蛇行部では水があたるところに大きな淵ふちができ、そのすぐ上流には荒い瀬の流れが見られます。しかし巴川は昭和49年(1974年)の七夕豪雨たなばたごううの災害後に、おおきく改修されて、本流をはじめほとんどの支流ではそういった典型的な河川景観は見られなくなってきています。しかし堤防の中の流れの中にも瀬と淵があり、アユなどの速い流れを好む魚たちが生息しているのです。

ここではアユ、オイカワ、カワムツ、アブラハヤ、ウグイ、カマツカ、シマドジョウ、シマヨシノボリ、アユカケ、ボウズハゼの魚類とヒラテテナガエビが紹介されています。

※ウナギ、コイ、ギンブナ、アマチチブ、モクスガニは「下流域のさかなたち」、ドジョウ、クロベンケイガニは「小川のさかなたち」、カワヨシノボリ、アマエビ、カワナは「上流域のさかなたち」をごらんください。



アユ

(長尾川産/写真・板井)

よく成長すると体長30cmほどになる回遊魚ですが、これほどの大きさになるのは静岡県内では富士川などの大きな川に限られています。流線型のオリーブ色をしたアユ科

の魚です。胸びれ後部にある鮮やかな黄色斑が特徴です。鱗は細かく、背びれと尾びれのあいだに肉質の脂びれをもち、口は大きくて、くし状の歯をもっています。この歯で石の上についた微小な藻類をそぎ取って食べて生活しています。

秋に川の下流近くで生まれた仔魚はすぐ海に下り、海で体長5cmほどの若魚に育つと、早春に再び川に入り中流まで溯上してゆきます。夏の間、川底の石の上の微小な藻類を食べて成長し、成長したアユは流れの速い瀬でなわばりをもち、侵入してくるアユを追い払ってなわばり内の食物を独占します。

この習性を利用したのが友釣りです。晩秋には下流の小砂利の底質のところを下って繁殖行動を行い、やがて死亡してしまいます。寿命はわずか1年です。

アユはいちじるしく水質の悪い川を除きたいの川にさかのぼりますが、1mをこえるような落差のある堰堤などの河川横断工造物があると、溯上できず、上流に空白域が生じることとなります。食用として美味で塩焼きなどとして利用されます。

巴川水系では巴川、大沢川、長尾川、大谷川放水路から生息が確認されていますが、現在アユの生息に最も適した環境をもっているのは長尾川だけです。この長尾川も、渇水期になると下流部の水がとぎれて巴川とつながらなくなってしまい、魚が移動できなくなってしまうので、生息条件はアユにとっては必ずしも良いとはいえないのです。



(清水区興津川産/写真・板井)

オイカワ(雄)

(巴川産/写真・安藤)

体長12cmほどのコイ科の魚です。背は青褐色、腹部は銀白色で、体側に青緑色と淡い桃色の斑紋が交互にならんでいます。雄の体色は鮮やかで、雌や未成魚はごく淡い色をしています。また雄は雌に比べて大きく、とくに繁殖期には雄はさらに鮮やかな色あいとなり、吻部や両あご、眼の下、鰓ぶた、ひれに追星と呼ばれる白色の突起ができます。またひれ、とくに尻びれが長く伸びます。おもに水生昆虫などを雑食しています。一般に雌や幼魚はハヤ、雄はジンジッパヤと呼ばれています。



巴川水系では巴川本流からほぼすべての支流、大谷川放水路のほか、遊水地などの池からも見つかっています。巴川水系に生息する魚類の中で分布域が最も広く、そして数が最も多い魚の一つです。

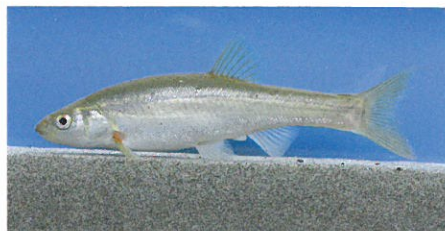
カワムツ

(姫路市産/写真・増田)

体長20cmになるコイ科の純淡水魚です。オイカワと似ていますが、体側中央部には濃い藍色の太い縦帯があり、オイカワと区別できます。オイカワと同じく雄が大きく、また繁殖期の雄は頭部の下面や腹部が朱色を帯びます。近縁種に又ママツがいます。又ママツは鱗が細かく数が多いこと、胸びれと腹びれの前縁が朱色を帯びることでカワムツと区別できます。カワムツは川の中流域から上流域にかけて生息し、おもに水生昆虫から付着藻類まで雑食して生活しています。カワムツの天然分布域は静岡県西部地域より西方、又ママツはさらに西方にあり、巴川流域ではいずれも移入種です。



巴川流域ではカワムツは巴川、長尾川、大沢川と麻機地区の小流などで見つかり、又ママツは麻機地区周辺の巴川と浅畑川などから見つかりました。



アブラハヤ

(麻機地区小流産/写真・安藤)

体長 12cm ほどのコイ科の魚です。鱗が細かく、頭部から尾まで黒色の縦帯があります。尾柄は細く長く、尾びれの付け根に半月状の黒色の斑点があります。これらの特徴は近縁種のタカハヤとの区別点となっています。本種は川の上流域から下流域にかけて広く生息し、付着藻類や水生昆虫などを雑食しています。タカハヤと共存する川では、本種は下流側に分布し、混生域ではやや流れのあるところにいます。釣りでかんたんに釣れますが、苦いのであまり利用されません。

巴川水系では巴川、大沢川、塩田川、吉田川、長尾川やその他の小流などに広く生息しています。山原川からは記録していませんが、詳しく調べると見つかるものと思われます。



ウグイ

(兵庫県大朽川産産/写真・増田)

体長 30cm 以上になるコイ科の回遊魚です。未成魚はアブラハヤやタカハヤと似ていますが、鱗がさらに細かいこと、尻びれの起点が背びれの基底の後端より後から始まることで区別できます。本種には回遊性のものと純淡水性のものがありますが、巴川のような小河川では、回遊性のものしかいないことが多いのです。回遊性のものは春に海から溯上して産卵します。

巴川にウグイが産卵のためにさかのぼってくることは確認されていませんが、未成魚は巴川と大沢川で見つかっています。産卵が行われない川でも未成魚が見つかることがあります。その場所に入り込んだ経路などはわからないことが多いのです。

カマツカ

(巴川産/写真・安藤)

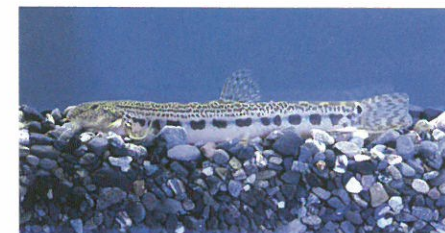


体長 16cm ほどになるコイ科の魚です。吻がとがり、口は頭部の下面にあって、口ひげが 1 対あります。体色は淡褐色で体側に黒色の斑紋が 7 つほどならびます。中流域から下流域の砂れき底にすみ、砂の中にもぐって目だけを出していることが多く、あまり気づきません。砂の中の底生動物などをおもに食べ、口唇を伸ばして砂ごと吸い込んで食べ物をこし、砂は鰓ふたから吹き出します。本来の分布域は、カワムツと同じように御前崎以西で、巴川など静岡県の中中部地域以東の川のもは移殖と考えられています。きれいな川のもは食用となり、塩焼きとしても美味です。体型がキスに似ているのでカワギスと呼ぶ人もいます。

巴川水系では巴川の中・下流域、浅畑川および大谷川放水路に生息することが確認されています。詳しく調べるとほかでも見つかるものと思われます。

シマドジョウ

(長尾川産/写真・安藤)



体長 10cm ほどのドジョウ科の魚です。体は円筒形で細長く、体は肌色をしていて体側に黒色の斑点が 10 個ほどならんでいます。6本の口ひげがあり、眼の下にとげがあります。つかまえるとそれを立てます。ドジョウとちがい、川の中流域など流れのあるところにすみ、砂または砂れきの中にもぐっています。静岡県内に広く分布しています。骨は硬いですが食用にできます。

巴川流域では巴川本流、大谷川放水路をはじめ山原川を除くほとんどの川から見つかっています。山原川にも確実に生息していると思われます。なお大沢川ではスジシマドジョウの一種が見つかっています。



シマヨシノボリ

(巴川産/写真・安藤)

体長6cmの回遊性のハゼ科の魚です。ほお部に複雑な赤いミミズ状の模様があります。尾びれなどひれの色

はうすく、数列の濃色の小斑点がなっています。腹部中央には青色の長方形の斑紋があり、産卵期の雌はとくに鮮やかです。中流域のおもに瀬にすみ、しばしば上流域にもぼります。底生動物や付着藻類を食べて生活し、晩春に繁殖して、石裏に産み付けた卵を雄が保護します。ふ化した仔魚はいったん海へ下り、初夏に未成魚となって川に溯上してきます。食用になりますが、小さいので佃煮などとして食されることがふつうです。

巴川水系では巴川、山原川、大沢川、塩田川、長尾川などの中流域から上流域、大谷川放水路に広く生息しています。山原川の山原堤の上流にも本種が見られますが、山原堤のため池を拠点として陸封されているのかもしれない。



アユカケ

(西伊豆町仁科川産/写真・秋山)

体長25cmほどの回遊性のカジカ科の魚です。頭部が大きく、鰓ぶたの後端に4本のとげがあり、最も上方のと

げはかぎ状に上に曲がっています。体には鱗がなく、体側に3本の黒色の斑紋があります。中流域の大きな岩のかげにかくれて生活し、幼時は水生昆虫などを食べますが、大きくなるとアユなどの魚類を食べようになります。秋が深まると成魚はしだいに川を下り、川の出口近くの海で繁殖します。冬に海で生まれた幼魚は初春に川を上ります。肉質は上品で唐揚げなどで食べると非常にうまい。一時数がいちじるしく減り絶滅が心配されたのですが、近年はやや回復傾向にあるようです。

巴川では大谷川放水路だけで確認されています。数も多くはないようです。

ヌマチチブ

(巴川産/写真・安藤)

体長12cmほどになる回遊性のハゼ科の魚です。胸びれの基部に黄土色の横帯があり、その中に赤橙色の線があ



ります。また第1背びれの上に赤黒い線があること、第1背びれの棘は伸びることがあっても先端が丸いことなどで近縁種のチチブと区別できます。川の中・下流域のおもに淵などの流れのゆるいところの水生植物や石の陰にかくれていることが多く、雑食で付着藻類を多く食べています。チチブがいる川ではチチブの生息する河口域や下流域より上流側に生息します。

巴川水系では、現在のところ巴川、大沢川、大谷川放水路などの下流域・中流域のほか、ときに上流域でも見つかることがあります。詳しく調べると広くほかの河川からも見つかるものと思われます。

スミウキゴリ

(兵庫県浜坂町岸田川産/写真・秋山)

体長10cmほどになる回遊性のハゼ科の魚です。鱗が細かく魚体はぬめぬめしています。頭部は上下にへんぺいで眼と眼の間が離れています。第1背



びれの後端には斑紋がないこと、尾びれに尾柄の幅の3分の1以上ある黒い斑紋をもつことなどで、近縁のウキゴリと区別できます。ウキゴリはスミウキゴリよりはやや小さく体長9cmほどで、第1背びれの後端に、はっきりとした黒い斑紋があります。いずれも淵の川岸部などの流れのよどんだところにおもにすみ、小魚や水生昆虫、陸生の昆虫などを雑食して生活します。未成魚はよく群れて中層に浮かんでいます。

スミウキゴリは巴川水系では巴川本流、大沢川、吉田川、大谷川放水路など多くの川に見られます。ウキゴリは大谷川放水路で見つかっています。



ボウズハゼ

(岡部町朝比奈川産/写真・安藤)

体長 10cm ほどになる回遊性のハゼ科の魚です。頭部と腹部の断面がやや四角い魚です。口は下方につき、吻から前頭部にかけてふくらんでいるのでボウズの名があります。腹びれ吸盤は吸着力が非常に強く血管が集まった一文字の赤い線があります。川をさかのぼる能力はきわめて大きく、川水がほとんど流れていないようなコンクリート面でも、腹びれと口を用いて巧みにのぼってゆきます。南方系の魚で黒潮のあたる地域に分布します。川では中流部の流れの速い瀬にすんで、吻を突きだして石面の付着藻類をこそぎ取って食べて生活しています。

巴川水系では巴川と吉田川で見つっていますが、数はごく少ないようです。



ヒラテテナガエビ

(葵区安倍川産/写真・板井)

体長 8cm ほどのテナガエビ科のエビです。雄の第 1 胸脚が長いうえに太いので他のテナガエビ類と区別できます。成長した雄の体色はしばしば深い緑色をしています。本種は回遊性で、中流域から上流域にまでさかのぼって生息します。流れの速い瀬で、日中は石や水生植物のかげに隠れていますが、暗くなると盛んに動き回り食物をとります。美味しい種類です。

巴川水系では巴川本流の中・上流域で見つっています。

下流域のさかなたち

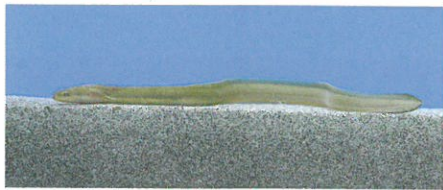


巴川下流域 (能島) 写真・板井

巴川はその大部分が低湿地帯の流れで、下流域はとくに長く発達しています。そしてコイやフナなどのゆったりとした流れにすむ魚の生息の場となっています。大型の外来魚のソウギョも放流されてすみついています。またこのような魚のほか、川と海とを回遊する回遊魚や一時的に海から川に入り込んでくる周縁魚なども中流域までの間に豊富に見られます。それらのなかでとくに多いのがハゼ類で、大部分は底生生活をしています。

ここではウナギ、ギンブナ、コイ、タイリクバラタナゴ、ナマズ、カムルチー、ボラ、カワアナゴ、テンジクカワアナゴ、ゴクラクハゼ、チチブ、マハゼ、アシシロハゼ、ミミズハゼの魚類、ミソレヌマエビ、スジエビ、テナガエビ、ミナミテナガエビ、モズクガニが紹介されています。

※イセゴイ、スズキ、シマイサキ、コトヒキ、アベハゼ ヒナハゼ ウロハゼは「河口のさかなたち」、アユ、オイカワ、ウグイ、カマツカ、アユカケ、ヌマチチブ、スミウキゴリは「中流域のさかなたち」、ドジョウ、メダカ、カダヤシ、マシジミ、クロベンケイガニは「小川のさかなたち」、モツゴ、ゲンゴロウブナ、オオクチバス、ブルーギル、トウヨシノボリ池沼型、アメリカザリガニ、ヒメタニシ、スクミリンゴガイは「池沼・遊水地のさかなたち」をごらんください。



ウナギ

(巴川産/写真・安藤)

体長 100cm ほどになるウナギ科の回遊魚です。体は円筒状で細長く、背びれ、尾びれ、尻びれが一続きになっています。胸びれは大きいですが、腹びれがありません。体色はさまざまですが、背は暗色で腹部は銀白色です。ウナギは、太平洋の深海で生まれ、黒潮に乗り、レプトケファルスと呼ばれる幼生となって 12 月～4 月ごろ日本に接岸します。そして変態してシラスウナギとなって川をさかのぼります。この幼魚をメソッコなどと呼んでいます。川の下流域～上流域、湖沼などに広く生息し、おもに夜間に活動して魚やエビ・カニ類を食べて生活します。成長したウナギは秋に産卵のため海に下ります。

巴川水系では巴川、大沢川、塩田川、大谷川放水路などから見つっていますが、おおよそ全河川にいるものとみてよいでしょう。



ギンブナ

(巴川産/写真・板井)

ふつう体長 20cm、大きなものでは 25cm になるやや大きなフナです。体高は比較的高く、ゲンゴロウブナ(ヘラブナ)と見まちがえることもあります。しかし、1 番目の鰓の鰓耙の数は 48 本程度で、ゲンゴロウブナよりも少ないことで区別できます。静岡県下の平野部の河川、小川や池沼に広く生息し、釣りの好対象となっています。釣りではヘラブナに対してマブナと呼ばれます。小型のものは甘露煮などとしてかつてはよく利用されたのですが、近年は食卓にのることは少なくなりました。

巴川水系では、巴川や各支流の下流域に広く生息しています。遊水地やため池ではゲンゴロウブナがむしろ多いようです。

コイ

(巴川産/写真・安藤)



野生型に近いコイ

体長 50cm、よく成長すると 80cm ほどになるコイ科の魚の代表種です。フナ類に似ていますが、頭部がとがり、口が下方についていること、2 対の口ヒゲがあること、背びれが長いことで区別できます。静岡県に広く分布し、分布域はギンブナの分布範囲とほぼ重なりますが、古くから河川や池沼に移殖されてきたため、古来からの生息範囲はまったくわからないようになってしまいました。典型的な野生のものは細長い円筒形ですが、移植されたものには体高の高いものが多いようです。繁殖は晩春にヨシやマコモなどの抽水植物帯で行い、卵は植物の茎や葉に産み付けられます。冬は水の温かい深みにはいって越冬します。古くから洗いやこいこくとして利用されてきましたが、最近は家庭ではあまり利用されなくなったようです。

巴川水系では巴川の本流や支流の下流域の流れがゆるいところ、遊水地やため池に多く生息しています。一般に川では野生型のもが多く、遊水地やため池などでは放流によると推測される体高の高いものも多く、大谷川放水路などでは色ゴイも見られます。巴川や遊水地などではこの魚の釣りも盛んです。麻機地区にかつてあった麻機沼では柴あげ(柴揚げ・柴上げ)漁が行われ、現在も遊水地でその伝統文化が守られています。



麻機遊水地の柴あげ漁(野文)

なお巴川本流下流域にはソウギョも見られます。中国原産の魚ですが、体長 1m ほどの大型になり美味しいので、第二次世界大戦中に中国から移殖され各地に移されました。巴川にも何度か放流されたことがありますが、巴川のような小さな川では繁殖できず、現在、能島付近などで見られるあまり大きくない魚は、ごく近年に移殖されたものと思われる。



タイリクバラタナゴ

(巴川産/写真・安藤)

体長6cmほどのコイ科の魚。体は左右にへんぺいで、こうした体型は止水域で遊泳するのに適しています。

体型や体色は雌雄でちがい、とくに繁殖期の雄は、背が盛り上がり、背部は青緑色に輝き、また胸部側面から腹面にかけてと尾部から尾びれ中央にかけてが朱色になります。いっぽう雌や幼魚は一樣に淡い褐色で背びれの基部に黒い斑紋があります。繁殖はドブガイなどの二枚貝で行い、卵は、二枚貝の中に産み着けます。タイリクバラタナゴは観賞魚としてとくに好まれる魚ですが、外来魚なので、飼育したものを安易に川に戻さないなど取り扱いに注意が必要です。

巴川では本流の下流域から中流域の下部の流れのゆるやかなところ、大沢川、大谷川放水路、浅畑川、麻機遊水地やその周辺の小川に広く生息しています。



浅畑川産/写真・安藤

ナマズ

体長50cmほどに成長します。背びれは小さく、体の前方についていますが、尻びれは長く、尾びれにつながっています。

口もとに長いヒゲがあるのが特徴ですが、幼時に3対あったものが成長すると2対になります。おもに池沼や川の下流域に生息し、日中は水草や石などの陰にひそみ、夜間に活動して魚やエビなどを捕食して生活しています。繁殖期は梅雨のころで、水田や水草のあるよどみで産卵します。食用として利用でき、蒲焼きにすると美味です。

巴川水系では本流や支流の下流域の流れのゆるいところ、遊水地の池などに見られます。



麻機遊水地産/写真・伴野

カムルチー



巴川産/写真・脇谷

体長70cmほどになるタイワンドジョウ科の純淡水魚です。魚体はやや細長く円筒形です。背びれと尻びれは長く、体側には暗色で輪郭が不ぞろいの丸い斑紋が2列にならびます。頭部の形状は蛇の頭のように、英語名でスネークヘッドというのなっとくできます。一般に「雷魚(らいぎょ)」と呼ばれています。中国大陸原産で、カムルチーの名は朝鮮半島を経て移入されたので、現地の名が採用されました。現在は日本中に広がっており、低地の河川や湖沼に広く分布し、生息しています。水草が茂るところの底層にひそみ、小魚や甲殻類、カエルなどを好んで捕食して生活します。この魚は比較的浅いところで生息するのですが、それは空気呼吸が必要なためと考えられています。長い間空気を吸わせないでおくとおぼれ死んでしまいます。カエルに似せた疑似餌などでの釣りでつれ、この釣りのファンも多いようです。

巴川では本流などの下流域などにいますが、とくに麻機地区の巴川や遊水地の池に多く、60cmほどの大物が水面に浮かんでいるのがよく見られます。



幼いウシガエルを狙うカムルチー(麻機遊水地)

/写真・伴野



巴川産／写真・脇谷

ボラ

体長70cmのボラ科の周縁魚^{しゅうえん}です。目に脂^{しけん}とよばれる半透明のまぶた状のものが発達します。胸びれの付け根の上部に青黒い斑紋^{はんもん}があります。これらはほかのボラ類との区別点になります。

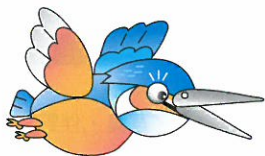
日本全国の内湾、河口、川の下流域にふつうに見られる魚で、春に川に入^{かちやくせう}って川底の付着藻やデトリタスなどを盛んに食べ、水温の下がる冬には川を下り、多くは海に出ます。幼魚はとくに川によく入りますが、成長とともに川に入らなくなり外海に出てゆきます。

キラ、ハク、オボコ、スバシリ、イナ、ボラなどと成長とともに呼び名が変わる出世魚です。川に入るボラ類にはセスジボラ、メナダ、コボラなど多くあります。ボラは静岡県でも広く分布し、県西部ではとくに秋から冬にかけてのものは刺身や洗いなどとして大いに利用されていますが、静岡市などではほとんど利用されていません。

下流景観の長い巴川や大谷川放水路では結構上流まで上り、巴川本流では遊水地付近を過ぎてさらに上流の中流域まで達し、支流では大沢川や塩田川、浅畑川にも入ります。セスジボラは体長25cmほどになり、セスジの名の通り背中線に隆起線があります。巴川と大谷川放水路から記録されています。大型になるメナダは巴川から、小型のコボラは大谷川放水路から見つかります。



清水区波多打川産／写真・秋山



カワアナゴ

(吉田町湯日川産・巴川産(右上)／写真・板井)

体長20cm以上になるカワアナゴ科の回遊魚^{かいゆう}です。カワアナゴ類はハゼの仲間ですが腹びれ^{きゅうぼん}は吸盤にはなっていません。巴川水系にはカワアナゴ、チチブモドキ、オカメハゼ、テンジクカワアナゴの4種のカワアナゴ科の魚が知られていますが、カワアナゴはその中で最も大きい種です。これらの種を正確に見分けるときには、頭部の側面の感覚器のようすを調べる必要があります。本種はおもに川の下流域に生息しますが、中流域までさかのぼるものもあります。夜間に活動して小魚や甲殻類などを食べて生活しています。見かけは悪いですが、塩焼きなどで食べると非常に美味しい魚です。

巴川本流や塩田川の下流域、大谷川放水路で見つかります。岸辺の水生植物の間や石の陰などにひそんでいることが多いようです。



テンジクカワアナゴ

(大谷川放水路産／写真・板井)

体長15cmほどの回遊性^{かいゆう}のカワアナゴ科の魚で、カワアナゴほど大きくはありません。カワアナゴ科の魚としては、ほかにチチブモドキ、オカメハゼもいますが、静岡県の河川では生息数はカワアナゴに比べ少ないようです。これらのすみ場所や生態もカワアナゴとほぼ同じと考えられています。カワアナゴ科の魚は南方系の魚で、静岡県には黒潮に乗って分布を広げたと考えられています。

巴川水系では現在のところテンジクカワアナゴは大谷川放水路だけで、またチチブモドキは巴川と大谷川放水路の下流域、オカメハゼは巴川下流で見つかります。現在見つかるのはほとんどが小型の魚なので、まだ定着はしていないのかもしれない。





ゴクラクハゼ

(吉田町湯日川/写真・板井)

体長7cmほどになる回遊性のハゼ科の魚です。川の下流域から汽水域に多く生息しています。河川での種類が多いヨシノボリ属の中ではもっとも大きくなる魚です。ほおに複雑な暗色の模様があり、また体側中央部に5～6個の黒い斑紋が見られますが、生きているときは、るり色の斑点が目立ち、この黒色斑紋がはっきりしなくなります。静岡県に広く分布していますが、生息密度の高い川は限られています。

巴川水系では現在のところ巴川下流域、塩田川の下流域および大谷川放水路から見つかっています。いずれのところでもあまり多くはないようです。



チチブ

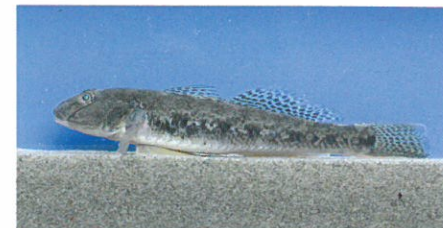
(兵庫県浜坂町岸田川産/写真・秋山)

体長7cmほどになる円筒形をしたハゼ科の回遊魚です。近縁種のヌマチチブとよく似ていますが、ほおの斑点が小さいこと、第1背びれの棘がオスもメスも糸状にのびることなどで区別できます。またヌマチチブには胸びれの基部の黄土色の横帯の中に赤橙色の線がありますが、本種にはありません。この赤橙色の線は死ぬと薄くなるので区別が難しくなります。本種は下流域が発達した川の河口近くの下流域に見られます。ヌマチチブより下流側に生息し、川の中流域にまでさかのぼって生息することはありません。ハゼ釣りではヒメハゼやウロハゼとともに外道(げどう: 目的外の魚)としてよく釣れる魚です。

巴川では本流の河口部に生息しています。

マハゼ

(巴川産/写真・安藤)



かなり大型になる汽水性ないし海水性のハゼ科の周縁魚で、普通は20cm未満で、1年で成熟して死にます。体はやや透明感のある淡褐色で、体側の中央部に小さな暗色の斑点が不規則にならびます。ひれには小黒点列がありますが、尾びれの下方3分の1にはこれがありません。晩春から秋にかけて川の中で生活し、秋が深まって水温が下がるとともに徐々に川の下流に集まり、冬になると海に下ります。1年で成熟し、晩冬から早春期に海底の泥底や砂泥底のところで繁殖します。その後大部分は死んでしまいます。釣りの好対象魚で、天ぷらとして利用されることが多いようです。

マハゼは巴川では下流域の河川形態のところではたいてい見つかっています。分流にあたる大谷川放水路のほか、支流の大沢川や塩田川、浅畑川にも入ります。

アシシロハゼ

(兵庫県矢田川産/写真・増田)



体長7cmほどのハゼ科の周縁魚です。よく成長した魚は暗色の体側に明色の細い横帯が10本ほどありますが、幼時はそれが目立たず、マハゼによく似ています。しかし、頭部が小さい、頭部のほお部や鰓ぶたに鱗がない、体側の鱗の数が少ないなどのちがいがあり、区別できます。泥底や砂泥底にすんでいて、繁殖はマハゼとはちがいで夏に行います。

巴川では河口域と大谷川放水路で見つかっていますが、マハゼよりはかなり少ないようです。詳しく調べると山原川、大沢川、塩田川などの下流域でも見つかると思われます。



ミミズハゼ

(巴川産/写真・安藤)

体長7cmのハゼ科の周縁魚。体は円筒形で細長く、頭部は上下にかなりへんぺいです。鱗はまったくありません。多くのハゼに前後に2つある背びれは、本種では1つしかありません。色彩は褐色から灰緑色まで変化に富んでいます。河口近くの満潮時に海水が侵入してくるいわゆる感潮域とそのすぐ上流の淡水域、あるいは完全に海水となった磯の石の下に見られます。

巴川のほか大谷川放水路の河口部でも見られますが、いずれの川も河口近くの川底は泥や細砂が多く、あまり多くは生息していないようです。体が半透明でよく似た体型をしているシロウオは、春先に産卵のために海からのぼってくる回遊魚で、近隣の多くの川での生息が知られていますが、巴川での記録はまだありません。川の浄化が進んでいるので、巴川でも近いうちに見つかるものと思います。



ミゾレヌマエビ

(吉田町湯日川産/写真・板井)

体長が3cmほどのごく小さなヌマエビ科のエビです。体はかなり透明で、背中中央に褐色の線、体側に小さい白点や赤点があって、きれいなまようをしています。南方系の回遊性のエビで、川の下流域から中流域にかけて生息します。

巴川水系では巴川、大谷川放水路、大沢川や麻機周辺の小川から見つかっています。巴川水系にはほかにヤマトヌマエビ、トゲナシヌマエビといったヌマエビ類もみられますが、ミゾレヌマエビに比べると数はずっと少ないようです。



トゲナシヌマエビ
(大谷川放水路/写真・板井)

スジエビ

(麻機遊水地産/写真・板井)

川エビの中では中型の体長6cmほどのテナガエビ科のエビです。この科ではスジエビ類に属し、テナガエビ類よりはやや小さく、雄の第2胸脚もあまり長くはありません。スジエビ類には肝上棘(かんじょうきょく)と呼ぶ棘が頭胸甲にないことでテナガエビ類と区別します。頭胸部、腹部背面に濃い褐色のすじがあります。本種には池などの淡水で生活するものと淡水と海とを回遊するものとがあり、前者はやや小型です。食用のほか、釣りの餌としても使われます。

巴川水系に広く生息し、巴川の本流および各支流の下流域から上流域にかけて生息するほか、麻機遊水地やため池などにも広く生息しています。オオクチバスなどがいるため池に高い密度で生息していることがあります。

巴川水系に広く生息し、巴川の本流および各支流の下流域から上流域にかけて生息するほか、麻機遊水地やため池などにも広く生息しています。オオクチバスなどがいるため池に高い密度で生息していることがあります。



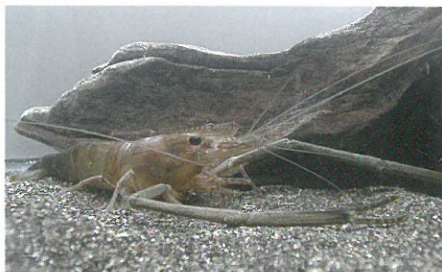
テナガエビ

(横浜市産/写真・秋山)

体長9cmほどのテナガエビ科のエビです。名の通り「手」とよぶ第2胸脚が雄ではとくに長くなっています。川の下流域のゆるやかな流れのところのほか、池沼にもいます。夏に繁殖し、雌は卵を腹部に抱えます。卵は20日ほどでふ化して幼生となって母ガニから離れ、成長して稚エビとなります。本種にも陸封型と回遊型の2型があり、池などの淡水で陸封して生活するものは、川と海とを回遊するものよりもかなり小さいのはスジエビの場合と同様です。食用として美味で、漁業の対象ともなります。

巴川や大谷川放水路などの下流域で見つかるものは大型で、回遊する型と考えられますが、麻機遊水地やその周辺で見られるものは小型で淡水で暮らす型と思われる。





ミナミテナガエビ

(清水区三保産／写真・板井)

体長 10cm ほどのテナガエビ科のエビです。雄の第2胸脚きょうきやくが長く、テナガエビによく似ています。本種の第2胸脚のハサミ部の毛はまばらで、それが密なテナガエビと見分けることができます。また頭胸甲とうきょうこうの側面に3本の赤いすじがあります。テナガエビよりも南方に生息する種ですが、近年は静岡県の全域でこのテナガエビが目立つようになりました。地球の温暖化傾向と関連する現象かもしれません。本種も食用となります。

巴川水系では巴川と大谷川放水路の河口域から下流域にかけてかなり多く生息しています。場所によってはテナガエビより多いところもあります。



モクズガニ

(麻機地区小流産／写真・板井)

甲らの幅が6cmほどにもなるイワガニ科のカニです。ハサミに毛が密生し、藻のくずをつけているように見えます。ところからこの名があり、ケガニと言うこともありますが、静岡県ではズガニと呼ばれることの多いカニです。川の下流域から上流域にかけて広く生息し、小川などにも入りこみます。秋が深まると川を下って海の沿岸域に出て、早春に繁殖します。ふ化した幼生ようせいは沿岸域で生活し、稚ガニちがにとなって川をさかのぼります。成長したものはかなり大きくなり、美味しいので、静岡県内各地で食用として盛んに利用されています。

巴川では河口、本支流の下流域から上流域、小川・水路などに広く生息しています。

巴川や麻機沼の伝統的な漁具と漁法



柴あげ漁風景 写真・鈴木

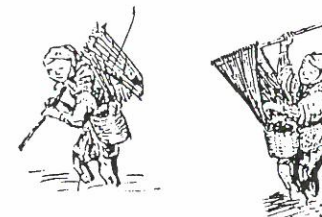
麻機沼あきはたには「柴あげしば」（柴揚げ・柴上げ）と呼ばれる伝統的な漁法がありました。これは柴（木の小枝）をたばねたものを沼に沈めておいて、集まってきた小魚やエビなどを柴をそっとあげながら待ち受けた網ですくい取るもので、おもに寒期に行われました。現在は麻機遊水地の2つの池で冬の行事のひとつとして行われているだけです。

巴川流域にはこのほかいろいろな独特の漁具や漁法がありました。一部は形を変えて現在も残されていますが、多くは失われてしまいました。静岡の郷土史家の松永繁雄先生が収集され記録されたものをいくつか紹介しましょう。

「かえんどう」は川の一部を石を動かしてせき止めて閉じこめられた魚などを手づかみするもので、おもにこどもたちの遊びとして行われたものようです。



かえんどう



ぼったい

網漁具では現在も残るものに「ぼったい」があります。柄のついた三角形の網で川岸や川底の魚を網に追い込んで捕らえます。

「三つまた」は、現在はきであみ叉手網と呼ばれますが、ぼったいとだいたい同じように使います。

「もじり」は竹ひごを編んでつくります。いちど魚が入ると戻れないしかけになっています。いまはプラスチックの「びんどう」や網製の「魚キラ」となりました。

「ねこんざい」というのは追いこみ網の一種で、魚などを根こそぎ捕るところからの名だそうです。おもに秋に行われ、川を下るウナギやモクスガニを捕るのがおもだったようです。

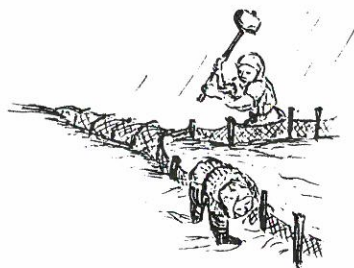
なお挿絵は静岡淡水魚研究会発行の機関誌「ざこ」10号より引用させていただきました。ほかにも「つつぼろ」などの漁具や「すずこ」、「ひぶれ」、「あんどう」、「まちあみ」などの漁法がありますが、詳しくは松永先生の著書をごらんください。



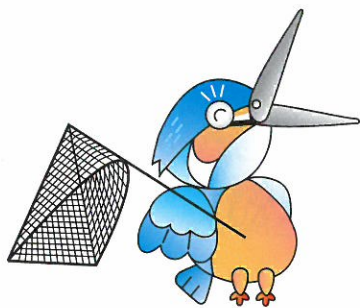
三つまた



もじり



ねこんざい



小川のさかなたち

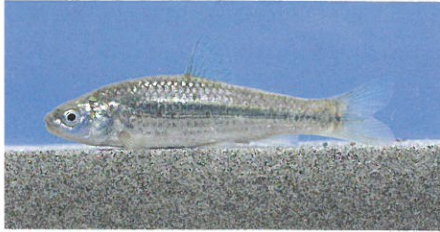


麻機地区の小川 写真・板井

巴川の流域には、かつて湿地とそれにつづく平地や小さな扇状地せんじょうちが広く存在したと考えられており、そこには小川などもあちこちに見られたことでしょう。しかし人々の活動がつづく中で平地や湿地は農地へ、やがて宅地や工場用地へと変わってゆきました。小川や水路もそれとともに水が汚れたり、コンクリート化し、あるいは埋められてゆき、小川の生きものたちのすみ場も大きく失われてしまいました。小川をすみ場とする魚の中には絶滅の危機ぜつめつに直面するものもでてきています。

ここではタモロコ、カワバタモロコ、ドジョウ、ホトケドジョウ、メダカ、カダヤシの魚類とマシジミ、クロベンケイガニを紹介しています。

※オイカワ、カワムツ、ヌマムツ、アブラハヤ、カマツカは「中流域のさかなたち」、タイリクバラタナゴ、ナマズ、ミソレヌマエビ、スジエビ、テナガエビ、モクスガニは「下流域のさかなたち」、モツゴ、トウヨシノボリ池沼型、アメリカザリガニ、ヒメタニシ、スクミリンゴガイは「池沼・遊水地のさかなたち」をごらんください。



タモロコ

(麻機地区小流産/写真・安藤)

体長8cmほどのコイ科の魚です。体型はやや円筒形で、口もとに1対のひげがあります。体側の中央に側線と平行してやや太い黒条が走り、これは尾部の末端付近でいったん切れて尾びれの基部に黒点としてあらわれます。体側の黒条は生時には目立たないことも多いですが、体側の黒条が細くて尾びれ基部で斑点とならないモツゴとの区別点となります。本種は今はあまり利用されませんが、けっこう美味でかつては食用として利用されていました。

巴川では流通大橋付近の本流や付近の小流におもな生息域があるようですが、生息密度は高くはないようです。この魚の自然分布域は志太平野（藤枝市、焼津市）以西とされていますので、巴川や安倍川にいるものは移殖によると考えられています。



カワバタモロコ

(磐田市産/写真・板井)

体長4cmほどの小型のコイ科の魚です。雄が繁殖期に黄金色に美しく彩られることから、藤枝市などではキンモロコ、キンターなどの呼び名もありました。日本特産種で、かつては田園地帯の小川や池で広く見られましたが、現在では生息地が減少し、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧ⅠB類に、静岡県のものでは同ⅠA類にあてられています。

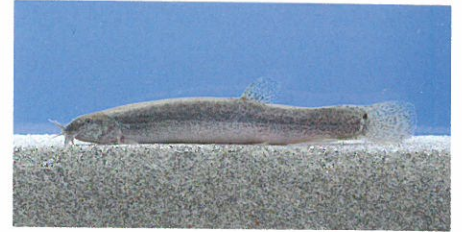
巴川の流通大橋付近で1個体採集され確認されました。北九州から静岡県の志太平野までが自然分布とされ、巴川では誰かによって移されたものと思われる。絶滅危惧種とはいえ、自然分布地以外に放流していいというわけではありません。

ドジョウ

(麻機地区小流産/写真・安藤)

体長10cmほどの円筒形のドジョウ科の魚。口もとに5対のヒゲがありま。体色は褐色で、腹部は黄みを帯びます。体側には細かい鱗がありますが、皮膚の中に埋もれていて、体表面に粘液が多いのでつかみにくい。ギンブナなどとともに生息域が広い魚のひとつで、川の下流や小川、池沼などに広く生息します。静岡付近では水田に水を入れたころ、そこに入りこんで産卵します。かんたんにすくって捕ることができ、かつては食用としてよく利用されていましたが、近年はあまり食べられなくなりました。

巴川水系の河川の下流域景観のところ、小川、遊水地やため池などに広く生息しています。県内から見つかった朝鮮半島産のカラドジョウは巴川水系ではまだ見つかっていませんが、購入した魚を安易な気持ちで放流してはいけません。

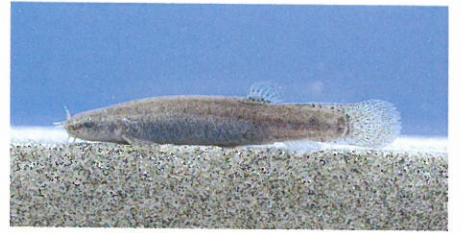


ホトケドジョウ

(麻機地区小流産/写真・安藤)

体長5cmほどの円筒状のドジョウ科の魚です。ドジョウよりかなりふと短く、4対の口ひげのうち1対が鼻孔から出ています。体色はうすい褐色で暗褐色の小さい斑点が散らばっています。丘陵近くの小川や湧水の流れの中にすんでいます。主食は水生昆虫などの小動物です。本種の生息場所は日本全国で狭まっており、絶滅が危惧されています。環境省のレッドリストでは絶滅危惧ⅠB類、静岡県中部では同ⅠA類にあげられています。

現在、巴川では麻機周辺の小流と吉田川のごく狭い水域にしろろじて残っています。かつては巴川の流域に広く生息していたのですが、宅地などの開発や圃場整備が進められて、生息地はほとんど失われてしまいました。長尾川沿いにも30年ほど前には広く生息していたのですが、今は完全に絶えてしまいました。





メダカ

(麻機地区小流産／写真・飯塚)

体長3cmほどのメダカ科の小魚。背びれは体のかなり後方について、尻びれは長い。上から見ると頭部から背にかけて黒色の縦帯じゅうたいが目立ちます。これらの特徴は外来種のカダヤシと区別するのに有用です。繁殖は春から夏にかけて行います。川の下流域や小川、池沼などに生息する日本の代表的な淡水魚ですが、各地で急激にその数を減らし、日本全体で絶滅危惧Ⅱ類、静岡県中部では絶滅危惧ⅠA類に記載されるほどになってしまいました。

巴川の流域には1970年代の初めころまでは広く生息しましたが、生息地を急速に失って、巴川流域ではいったんはほぼ絶滅してしまい、現在、巴川本流の中・下流域、大沢川、浅畑川、大谷川放水路の下流域やこれらに注ぐ小流、遊水地などに見られますが、これらのほとんどはその後持ち込まれたものと考えられます。



カダヤシ

(清水区三保産／写真・秋山)

メダカよりやや大きく体長4cmほどになります。メダカによく似ていますが、体の中央よりやや後方にある背びれはメダカのように三角形ではなく、丸みを帯び、尾びれも丸い。尻びれは短く、雄は変形して交接器となっています。背部の縦帯じゅうたい たんかっしょくは淡褐色です。北アメリカ原産の外来魚で、卵胎生らんたいせいといって交接して仔魚を生む魚です。メダカに比べて競争力が強く、入り込んだところではメダカの生息を急速におびやかしています。このため環境省により特定外来種に指定されています。ですから、すくい上げた魚を生かしたまま持ち帰ったり、自宅で飼育することはもちろん、他所に放流するなどしてはいけません。

巴川流域では巴川の下流域やそこに流入する支流などに生息しています。浅畑川でも採集されたことがあります。

マシジミ

(麻機地区小流産／写真・板井)



貝がらの幅が2cmほどのシジミガイ科の小型の貝です。殻の色は黄褐色から おうかっしょくのものが多いですが、黒褐色こっかっしょくのものもあります。殻の内側の縁部は青紫色で、河口部に生息するヤマトシジミはここが白いので区別できます。川の中流域から下流域、小川や水路などに生息しています。水が動くところであれば池にも生息します。マシジミは食用とはなりませんが、あまりおいしくはありません。



巴川水系では本流や各支流の下流域から上流域、小川・水路などに広く生息しています。

クロベンケイガニ

(巴川産／写真・板井)



甲らの幅が4cmほどのイワガニ科のカニです。黒っぽいカニで、海にあまり遠くない水域近くの平地の水田や小川などにふつうに見られます。水の中にはあまりいず、陸上で活動することが多いカニです。湿った土に穴をあけて日中はその穴の中において、夜に穴から出て盛んに活動します。

巴川水系では河口付近から巴川や大沢川、塩田川などの各支流や大谷川放水路などの下流域の景観のところの川岸に広く見られます。麻機遊水地付近や周辺の小川の土手にもいます。

絶滅の恐れのある魚類

静岡淡水魚研究会の会員らによって近年行われた静岡県の全県にわたる魚類調査で、静岡県の河川や湖沼から50科171種・亜種等の魚が記録されました。巴川で現在までに記録された魚類は32科83種ほどですので、全県のおよそ半分ですが、比較的小さな水系の魚種数としてはかなり多いといえます。

静岡県では2004年に「まもりたい静岡県の野生生物」のタイトルで^{ぜつめつ}絶滅の恐れのある生物種についてまとめたレッドデータブックを発行しました。淡水魚類では静岡県に生息する魚のうち、^{ぜつめつきく}絶滅危惧ⅠA類6種、ⅠB類4種、Ⅱ類6種、合わせて16種の絶滅危惧種のほか、準絶滅危惧3種、情報不足2種、要注目種32種を合わせて合計53種をレッドリストとして記録しました。このうち巴川水系に生息するものをあげると、つぎのようになります。

- ①絶滅危惧ⅠA類 ホトケドジョウ（全県ではⅡ類） メダカ（同Ⅱ類）……………2種
- ②絶滅危惧Ⅱ類 チワラスボ（全県も同じ）……………1種
- ③準絶滅危惧 アユカケ……………1種
- ④要注目種 イセゴイ アマゴ タカハヤ ガンテンイシヨウジ オカメハゼ
カワアナゴ テンジクカワアナゴ チチブモドキ クロコハゼ
クロミナミハゼ タネハゼ ヒナハゼ トウヨシノポリ池沼型
カワヨシノポリ……………14種

巴川水系では絶滅危惧種は3種、準絶滅危惧種は1種、要注目種は14種が記録されているわけです。私どもはこれらの絶滅危惧種を絶滅させぬよう、また他の魚を絶滅危惧に追いやらぬように河川や池沼の環境の保全に配慮する必要があります。

なお、巴川から全県で絶滅危惧ⅠA類のカワバタモロコが記録されていますが、この魚は巴川では移入種と考えられるので、レッドリスト種には含めません。

池沼・遊水地のさかなたち



麻機遊水地（野丈） 写真・鈴木

麻機地区には広大な低湿地があり、巴川はこの間をぬうように^{だこう}蛇行して流れる川でした。開発によって低湿地はいったんはほとんどが失われてしまいました。また巴川が自然に流路を変え、あるいは直線的に改修したあとにできた池も、いくつかをのぞき失われてしまいました。近年、かつての低湿地は遊水地として再整備され、多くの池もできましたが、再生された水域には外来種が多いなど課題もあります。なお、支流の大沢川の本支流や山原川の上流部にはかつて農業用水の確保のためため池が数多くつくられ、いまもかなり残っています。

ここではモツゴ、ゲンゴロウブナ、オオクチバス、ブルーギル、トウヨシノポリ池沼型の魚類、アメリカザリガニ、ヒメタニシを紹介しています。

※コイ、ギンブナ、タイリクバラタナゴ、ナマス、カムルチー、スジエビ、テナガエビは「下流域のさかなたち」、ドジョウ、メダカ、カダヤシは「小川のさかなたち」をごらんください。



モツゴ

(浅畑川産／写真・安藤)

体長7cmほどのコイ科の魚です。下あごが上あごより長く、口は上面に向いています。一見タモロコに似ていますが、口ひげはなく、体側の黒条は細く、尾びれ基部に斑点はありません。繁殖期の雄は頭部などに白色の追星が生じて体は紫色を帯びて黒っぽくなり、体側の縦条がはっきりしなくなります。おもに池沼や川の下流域、小流などの止水やゆるい流れのところに生息します。石や板切れなどの堅いものや水草の茎などに卵を産み、雄が卵を保護します。セルピンや魚かごなどでかんたんに捕獲でき、飼育するのもかんたんです。

巴川水系では本流や支流の大沢川、塩田川、継川、浅畑川など、大谷川放水路の下流域、小川や農業水路、遊水地の池や各地のため池などに広く生息しています。



ゲンゴロウブナ

(巴川産／写真・安藤)

フナ類では最も大きくなる魚で、体長30cm、大きなものでは40cmにもなります。体高が高く、体長の4分の1ほどもあり、一番外側の鰓の鰓把の数はギンブナのおよそ倍の100本ほどもあります。釣り人のいうヘラブナは、実はこのフナのことです。琵琶湖原産のゲンゴロウブナの改良品種であり、池沼やため池などによく放流されます。

巴川流域の遊水地やため池にいるフナの多くがこのフナです。巴川の下流域などでも見られますが、おそらくは遊水地などから流れ出たものでしょう。ただし、遊水地などで現在漁獲されるフナの多くのものの鰓把は約80本で、本来の数とギンブナなどのもつ数の中間です。どのようにしてこのような数になったのかはなぞです。

ブルーギル

(藤枝市蓮華寺池産／写真・板井)

バス科の陸封魚で、大きな個体では体長20cmをこえます。左右にへんぺいで体高が高く、体側には10本ほどの暗色の横帯があります。大きな頭のわりに口は小さく、鰓ふたの後端は青黒くなっています。ブルーギルの名はこの特徴によって名付けられたものです。オオクチバスとともに北アメリカ原産の外来魚で、移入した池沼などで日本の在来魚の生息をおびやかすところから特定外来種として指定され、移動や飼育などが禁じられています。

巴川水系では本流、大沢川、浅畑川の中・下流域、大谷川放水路、遊水地や各地のため池から広く見つかっています。上流域にため池があったりするような川ではとくに見つかる可能性が高いと思われます。

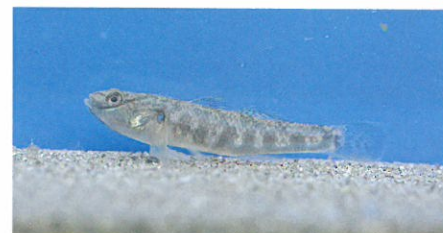


トウヨシノボリ 池沼型

(浅畑川産／写真・安藤)

体長5cmほどのハゼ科の陸封性純淡水魚です。シマヨシノボリによく似ていますが、いっそう小型でほおにはミズ状のもようがありません。トウヨシノボリと呼ばれている魚には実はさまざまなタイプのもが含まれています。ふつうのものは、その名のとおり雄の尾びれの基部の背側にオレンジ色の斑紋があるのですが、静岡県でトウヨシノボリ池沼型と呼ばれているタイプのものの雄にはこの斑紋があらわれません。これらはおもに天然湖沼のほか、ため池など止水域に生息しています。またそれに続く川のゆるやかな流れにも見られます。

巴川水系では麻機地区の遊水地などの池沼を中心に、それに続く本流の下流域や支流の浅畑川に見られるほか、大沢川や大谷川放水路などの緩流部からも見つかっています。





葵区鯨ヶ池産／写真・板井

オオクチバス

ブラックバスともいいます。体長50cmのバス科の陸封魚です。口が大きく、上あごの後端が眼の後端付近まで届きます。第1背びれと第2背びれは一見離れているように見えますが、ぎりぎりにつながっています。体側中央部には不規則な黒色の斑紋はんもんがあって、鰓えらふた付近から尾びれまで続きます。肉食性の魚で、比較的小さいころから魚食性を発揮し、魚類をよく捕食しますが、大型の甲殻類も食べます。北アメリカ原産の外来魚で、1925年に神奈川県の芦ノ湖に移殖されてから日本全体に急速に広がり、湖沼や沼、川の下流域などに広く生息するようになりました。漁業関係者、釣り具関係者、釣り人その他多くの人がこの魚の分布拡大に手を貸したと考えられています。

ここ20～30年の間、若者を中心にルアー釣りの対象として親しまれてきましたが、日本の在来魚の生息をおびやかすことで特定外来種に指定され、原則的に放流・移動などが法律で禁じられてから釣り人が減ってきたようです。静岡県ではそれより前から規則によってこれらの放流が厳しく制限されていましたが、法律になるまではあまり守られてきませんでした。

釣りは禁じられてはいませんが、釣った場合には殺して持ち帰り（生かしたまま移動させてはいけません）、食べるか処分することをすすめます。食べる場合にはムニエルがおすすめです、なかなかうまい魚なのです。

巴川の流域でも、巴川の下流域、各支流の下流域、大谷川放水路、遊水地の池や各地のため池などから記録され、生息が確認されています。



大谷川放水路産／写真・板井

アメリカザリガニ

(麻機地区小流産／写真・伴野)

体長10cmほどのザリガニ科のエビです。第1胸脚は発達し、ハサミは雄ではとくに大きくなります。しかし第2～第5胸脚は細い脚をしています。川の下流域から上流域下部にかけて、小川や水路、遊水地やため池、水田など流れが速くない水域のたいていのところに見られます。雑食性で水生植物から小動物、魚類の死体など何でも食べます。冬は土に穴を掘って越冬します。北アメリカ原産の外来種で、昭和の初めに食用となると考えられたウシガエルとともに移殖されました。餌えさとなると考えられたのですが、実際にはほとんど食べられないようです。日本に移殖された近縁種きんえんしゆの中には特定外来種として指定されているものもあります。

巴川流域の下・中流域、小流・水路や遊水地・水田などに広く生息しています。



ヒメタニシ

(麻機地区小流産／写真・板井)

殻の長さ3.5cmほどの円錐形えんすいけいのタニシ科の巻貝。殻は濃い褐色で、底部が角ばっています。交尾して子貝こいを生んで増えます。川水がゆったり流れる下流域、小川や水路、池沼などにふつうに見られます。

ヒメタニシは巴川水系では巴川、大沢川、浅畑川などの下流域から中流域、麻機地区などの小川、遊水地などに広く生息しています。水質がやや悪化したところにも見られます。小川がきれいだったころは食用とされたのですが、いまは食べる人がほとんどいなくなりました。オオタニシも同様の場所で見られますが、数はずっと少ないようです。





スクミリンゴガイ

(麻機遊水地産／写真・伴野)

ジャンボタニシとして知られている貝ですが、タニシではなくリンゴガイ科の巻貝です。殻の高さが6cm、ときに8cmほどになります。中南米原産

で、食用として養殖するために移入され、放棄された養殖池から逃げ出して各地に広がりました。静岡県内の各地に生息しています。川のゆるやかな流れのところや池沼、水田などに生息し、イネやレンコンなどを食害するとして知られています。繁殖は夏に行い、イネや抽水植物、コンクリート壁などの水面から数10cmのところ



交尾産卵中

に赤桃色の卵塊を産み付けます。巴川では麻機周辺の巴川本流や浅畑川などの小流、遊水地に多いですが、大谷川放水路でも見つかっています。



遊水地の浚渫工事に伴う水抜きと池の魚の調査

遊水地の浚渫工事が2000年の秋から始まり、池の水抜きが野丈の池から始まった。水は大きなポンプで浅畑川に放出した。魚は網で止めたが、小さな魚は網の目を抜けてポンプに吸い込まれた。運のいいものは生きてま川へと…。

しだいに水が減っていくが何箇所かにたまりができた。たまりに残された魚は、遊水地で釣りを楽しむ方や魚が好きな方々と協力して巴川や浅畑川に逃がした。魚は、フナ



麻機遊水地のカムルチー (写真・伴野)

の一種(以下たんにフナ)・モツゴ・ボラ・ブルーギル・ブラックバス・トウヨシノボリ・タイリクバラタナゴ・カムルチー。甲殻類は、アメリカザリガニ・テナガエビの一種・スジエビ・ミゾレヌマエビ。これらを軽トラックで川まで運び何回も往復した。池がこんなにもたくさん魚をすまわせていたことに改めて驚かされた。いるとは知っていたがめったに見ること

のないブラックバスも確かめることができた。大きいものは50cmは超えていた。

牛田の池は、ブルーギルとカムルチーが目立った。ブルーギルは、水がほとんどなくなってもヒメガマの地下茎のすき間をぬって深く深くもぐってしまう。この魚の生き残るためのパワーを見た。カムルチーはほとんど泥だけになってるところでもまったく平気。捕まえて胃の内容物を見てみた。飲み込んだばかりの15cmのフナが3尾とアメリカザリガニのハサミ1つ。

後日、重機が入ったあとを歩くと10cmほどのカムルチーが水際でたくさん死んでいた。どこかにひそんでいたのだろう。なぜ死んだかは不明。

2001年春、泥ざらえを終え、水を蓄えた野丈の池の魚類調査をした。気温21℃水温16℃、pH7.8。タモ網4人と投網1人で60分の調査。その結果、全長38cm～85cmのカムルチー7尾、全長24cm～44cmのフナ12尾、10cm前後のブルーギル2尾、5cm前後のモツゴ2尾。カムルチーの胃の中を調べたところ、ほとんど空で、1尾に消化されかかったアメリカザリガニが入っていた。少ないけれど池に魚がもどっていたことにホッとした。でも、この水抜きのあいだにウナギは1尾も見られなかった。これはいまだに謎のまま!

寄稿・足立京子(静岡淡水魚研究会)

外来生物

ある地域にもとからいた生物を在来生物といいます。たんに在来種または郷土種ということもあります。これらに対して外国や日本の他地域から入り込んできた生物を外来種と一括して呼んでいます。外来種には、つつましい生物もいますが、多くは大陸で多種との競争に勝ち残った競争力の強い生物です。これらが小さい島国である日本列島に入ってきた場合、島国にもとからいた生物は競争力が弱くてそれらに負けてしまうことが多いのです。

日本に移入した外国産の生物で、日本の在来種に危機的な影響を与える生物は、とくに法律で「特定外来種」として指定され、移殖や移動、飼育などが厳しく禁じられています。魚類ではオオクチバスやブルーギル、カダヤシが代表的な種です。このほか要注意種として監視する種もあります。

生きものを他の地域から勝手に持ち込んだり、逆に他地域へ持ちだしたりすることは、それが特定外来種でなくても、その地域や他の地域の生態系に大きな影響を与えることにつながるので、つつまなければならぬことは言うまでもありません。

巴川流域の外来生物

区分	魚類	甲殻類・貝類	は虫類・両生類
特定外来種	カダヤシ オオクチバス ブルーギル		ウシガエル
要注意外来種	ニジマス タイリクバラタナゴ ソウギョ カムルチー	アメリカザリガニ スクミリンゴガイ	ミシシippiaアカミミガメ
外来種		チチュウカイミドリガニ サカマキガイ	
内地産移入種	カワムツ ヌマムツ カワバタモロコ タモロコ キンギョ キンブナ ゲンゴロウブナ ズジシマドジョウの一種		
在来種の分布地に移入のあるもの	アマゴ キンブナ メダカ		

河口のさかなたち

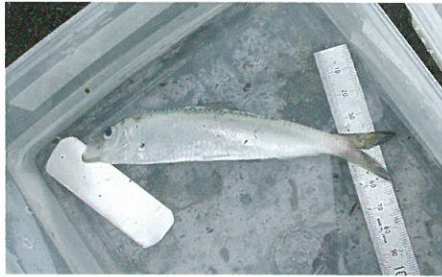


巴川河口（清水区） 写真・板井

河口は川と海の接点です。巴川の河口部は海と連続的になっており、河川内への海水の侵入がみられます。ですから付近には淡水と海水とが混じり合った汽水や海水に含まれる塩分に適応した魚が生息し、また海と川とを行き来する回遊魚などの通過路ともなっています。干潮時に干上がったときに見える堤防沿いの砂泥の干潟はせまいながら独特の生物を育てています。河口部はこのように多くの魚が見られる場所となっていますが、真の海水魚や多くの汽水魚は水温が低下する冬期には川を出て、海に入ります。このように河口部は生息する生物の季節による変化の大きい場所ともなっています。

ここでは、サッパ、イセゴイ、ゴンズイ、ガンテンイシヨウジ、スズキ、シマイサキ、コトヒキ、クロダイ、キチヌ、ギンボ類、サツキハゼ、クロコハゼ、ヒメハゼ、タネハゼ、アベハゼ、ヒナハゼ、アカオビシマハゼ、ウロハゼ、チワラスボ、クサフグの魚類とスジエビモドキ、インスジエビ、ミナミベニツケガニ、チチュウカイミドリガニを紹介しています。

※ウナギ、ボラ類（ボラ、セスジボラなど）、カワアナゴ類（カワアナゴ、テンジクカワアナゴなど）、チチブ、マハゼ、アシシロハゼ、ミミズハゼ、テナガエビ、ミナミテナガエビは「下流域のさかなたち」をごらんください。



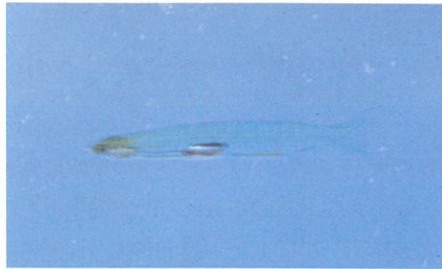
サッパ

(巴川産/写真・板井)

体長 13cm ほどのニシン科の周縁魚しゅうえんぎょです。背面はうす青色で体側から腹面は銀白色で、腹部がとくにへんぺいへんぺいになっている魚です。満潮時にはかなり

川の中に入りますが、完全に淡水のところまで行くことはないようです。河口で同じように見られる魚にコノシロがいます。この魚は背びれ後端の軟条が長くなんじょうのびるので区別できます。いずれも巴川河口にふつうに見られ、食用となります。釣り人はしばしばサッパをコハダと言いますが、コハダはコノシロの寿司屋での呼び名です。

巴川河口には、この冊子で取り上げた魚のほかヒイラギ、メジナやハオコゼ、底生の魚ではマアナゴ、ネズミゴチやクモハゼなどの周縁魚も見られます。



イセゴイ

(御前崎市箴川産/写真・大塚)

体長 50cm にもなるイセゴイ科の周縁魚しゅうえんぎょです。秋が深まったころ、レプトケファルスという半透明の幼生期ようせいに河口に入ってきます。この幼生は尾び

れの先端がすでに分かれていることでウナギなどの幼生と区別できます。背びれの後端の軟条はコノシロと同じようにのびています。静岡県内では伊東市の池で体長が 30cm 近い魚の記録がありますが、川では幼生へんたいや変態して間もない幼魚が見つかることが多く、巴川でも同じです。

巴川では河口から能島付近にかけての下流域で見ついています。大谷川放水路でも見つかるものと思われま

ゴンズイ

(清水区折戸湾産/写真・秋山)

体長 20cm ほどのゴンズイ科の周縁魚しゅうえんぎょです。口もとに 4 対のひげがあり、背びれ、尾びれ、尻びれが連続して



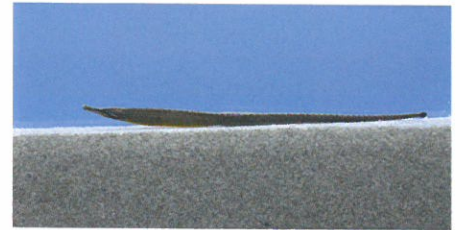
いてナマズに似ています。実際にナマズ目に属するナマズの親せきです。体色は暗褐色で、2 すじの黄色の縦線を持ち、この線は幼時にはよく目立ちますが、成長するにつれて目立たなくなります。幼時は群れて活動し、これをゴンズイ玉と呼んでいます。釣りでかんたんに釣れますが、胸びれと背びれの棘とげに毒腺どくせんがあるので要注意です。食用とするときには、みそ汁などにして食べる人が多いようです。

巴川河口で記録されています。

ガンテンイシヨウジ

(巴川産/写真・安藤)

体長 16cm ほどになるヨウジウオ科の周縁魚しゅうえんぎょです。体側に黒いふちどりのある白点があり、本種の名前はこ



斑紋はんもんを眼にたとえて付けられています。川の河口部の近くに限ってすみ、川を大きくさかのぼることはありません。本種やタツノオトシゴなどのヨウジウオ科の魚は受精卵を雄が育児嚢いくじのうで保護します。ヨウジウオ類としては、本種のほかテングヨウジヤイッセンヨウジなどが静岡県の川の河口近くで見ついています。ヨウジウオ類は南方系の魚で、静岡県でも黒潮の影響の強い河川で見られます。

巴川では河口で見ついています。写真の魚は雄ですが、すでに繁殖期を過ぎており、卵は抱えていませんでした。



スズキ

(巴川産/写真・脇谷)

成長すると体長1mほどになるスズキ科の周縁魚しゅうえんぎょです。県下の沿岸に広く分布し、幼時によく河口に入り、川の下流にもさかのぼります。成長とともにセイゴ、フッコ、スズキと呼び名が変わるいわゆる出世魚です。シーバスとよび、スポーツフィッシングの対象として近年とくに盛んに釣られるようになってきました。釣れたものは夏には刺身、洗いなどとして利用すると美味ですが、水質汚濁が大幅に改善されたといっても、巴川は数年前まで激しい汚れがあったので、巴川の河口や下流域のものを食用にすることはまだひかえた方がいいかも知れません。

巴川では河口から下流域にかけて見られ、未成魚は夏から秋にかけて川をかなりさかのぼっています。



シマイサキ (清水区三保産)
写真・秋山

シマイサキとコトヒキ

30cmほどになるシマイサキ科の周縁魚しゅうえんぎょです。いずれも体側に黒い縦条たいぞくがあり、これによりスミヤキなどと呼ばれています。この縦条はシマイサキは4本が体側に沿ってまっすぐであるのに対して、コトヒキは3本がやや下方に湾曲わんきょくしています。

静岡県しずおかの沿岸域には広く分布しており、これらの稚魚ちぎよは彼岸過ぎから群れをなして河口に入ってきます。大きいものは食用となりますが、少し磯臭いのが難点です。

シマイサキ、コトヒキともに巴川と大谷川放水路の河口部や下流域で見つかっています。



コトヒキ (清水区三保産)
写真・秋山

クロダイ

(兵庫県岸田川産/写真・秋山)

体長60cmに達するタイ科たいけいの周縁魚しゅうえんぎょです。体色は暗灰色から銀灰色ぎんがいしよくまでさまざまで、体側たいぞくに6本ほどの暗色の横帯おうたいがあります。沿岸におもに生息しますが、幼時は川にもよく入ります。出世魚のひとつで、成長とともに呼び名が変わり、清水あたりではチンチン、カイズ、クロダイといったように変化します。性転換を行う魚として知られていて、ほとんどはまず雄として成熟してから雌へと変わります。釣りの好対象となり、さまざまな漁法が考案されています。美味な魚で、塩焼き、刺身などとして利用されます。

巴川の開く清水港はクロダイ釣りの漁場として名高く、クロダイは巴川の河口部でよく見られます。



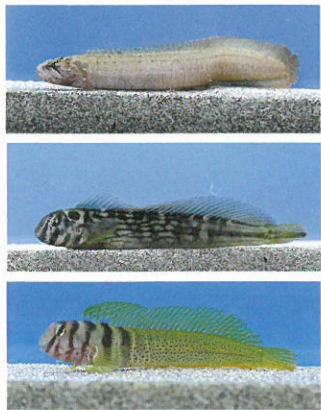
キチヌ

(清水区大橋川産/写真・秋山)

クロダイに似た体長35cmほどのタイ科たいけいの周縁魚しゅうえんぎょです。キビレともいいます。体色は銀灰色ぎんがいしよくで、クロダイのカイズに対してシロカイズと呼ぶこともあります。キチヌ・キビレの名の通り、ひれが黄色みを帯び、とくに胸びれ、尻びれ、尾びれおしびれの下半部は黄色が目立ちます。本種も成長とともに雄から雌へと性転換します。肉に甘みがあり、クロダイより美味として、釣り人が好むむきもあります。

清水港ではクロダイとともに多く、巴川の河口部でも本種はよく見られます。





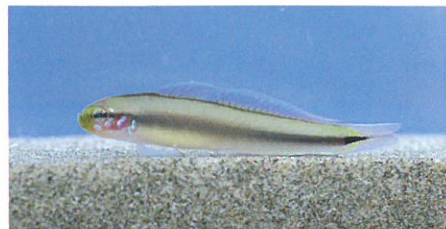
(写真上からダイナンギンポ、イダテンギンポ、ナベカ)

ギンポ類

(巴川産/写真・安藤)

ギンポと呼ばれる多くの種類の魚が河口から沿岸域に生息しています。美しい色彩をもつものが多く、分類のうえでは多くのグループ(科)を含むのですが、河口付近で見られるものはごく限られています。一般に体は細長く、背びれや尻びれも長く、底生で、河口ではカキ殻の間などにひそんでいます。

巴川河口ではダイナンギンポ、イダテンギンポ、ナベカの3種が見つかっています。ダイナンギンポは体長25cmほどになる魚で、一様な褐色の体色をしており、体側に網目状の感覚器官があります。イダテンギンポ、ナベカは体長10cm未満の小型ながら特有の美しい色もようをもつ魚です。



サツキハゼ

(巴川産/写真・安藤)

体長4cmほどの周縁魚。ハゼの名がありますが、近年はオオメワラスボ科またはクロユリハゼ科に分けられるようになりました。体側中央に黒色の縦帯があり、尾びれの付け根の中央に体側の縦帯につながる黒色の斑紋があります。生時には目の後方から尾びれまで明るい黄緑色の縦条が、黒色縦条の背側に沿ってあり、眼下や頬部にり色の斑点があって美しい魚です。ハゼの間ではめずらしく遊泳して生活するので、観賞魚に適しています。

巴川では河口近くにいます。満ち潮時に熱帯魚と見まがう魚が群れをなして川を上っていく姿はたいへん見事です。なお群れの中にはやや斑紋が異なるベニツケサツキハゼが混じっていることもあるようです。

クロコハゼ

(巴川産/写真・安藤)



体長4cmのハゼ科の周縁魚です。全体が黒っぽく、雄の背びれの中ほどに黒い斑点があります。学名はまだ決まっています。おもに河口付近の砂泥底に生息し、とくにカキ殻のあるところを好んですむようです。暖流である黒潮の影響のある水域にすむ南方系の魚で、ごく近年静岡県でも見つかるようになり、伊豆半島には定着している川もあることがわかりました。

巴川河口でも調査のたびごと採集され、よく見つかるようになりましたが、繁殖・再生産して定着しているのかどうかはわかっていません。

ヒメハゼ

(清水区波多打川産/写真・秋山)



体長7cmのハゼ科の周縁魚です。背側は全体に肌色を帯びていて、体側中央に2枚分の小黒点が4つ、尾びれの黒点も含めると5つならんでいます。マハゼの幼魚に一見似ていますが、マハゼのように大きくなり、また河口の汽水域の砂底でおもに生活し、ハゼ釣りをするとよく混じってとれる魚のひとつですが、マハゼのように川をさかのぼることはほとんどありません。この類にはミナミヒメハゼなど数種が鹿児島県以南から知られていますので、よく調べると黒潮に乗って入り込んだこれらの魚が見つけれられる可能性もあります。

巴川では河口部やごく河口に近い下流域で見つかっています。



タネハゼ

(巴川産/写真・大貫)

体長8cmほどのハゼ科の周縁魚^{しゅうえん}です。体は黒く、尾びれは大きく火炎状^{かえん}となっていて、他と区別しやすい魚です。河口の細砂底^{さいさいてい}のところに、ときに

見られます。この魚は南方系の魚で、静岡県^{しずおか}の河川には黒潮に乗って入り込んだと思われる。静岡県では伊豆半島の川など河口域の発達したいくつかの川の河口で見つかっていて、たいていは大型の個体です。ですから定着している可能性もありますが、繁殖は観察されていませんし、幼魚もまだ見つかっていません。

巴川では最近、河口部で頻繁に見つかるようになりました。



アベハゼ

(川崎市鶴見川産/写真・秋山)

体長4cmのハゼ科の周縁魚^{しゅうえん}です。尾部に2すじの暗色の縦条^{あんしょく じゅうじょう}があり、尾びれではさらに縦条^{じゅうじょう}が加わって放射状となります。頭部は丸く、トラの頭部

を連想させる暗色の複雑な模様があり、学名にはボラのようなハゼの意味が含まれています。川ではヒナハゼとほぼ同じところに生息しますが、本種は比較的浅い泥底の場所に多く見られます。とくに水質の悪化が進んで腐敗臭^{ふはいしゅう}がするようなたまりなど、他の魚がすまないところに高密度で集まっていることがあります。かわいらしいハゼで、水槽飼育も簡単です。

巴川では河口部から下流域にかけて生息しています。

ヒナハゼ

(巴川産/写真・安藤)

河口や川の下流^{さすい}の汽水域にすむ体長4cmほどのごく小型のハゼの周縁魚^{しゅうえん}です。体型はかなりふと短く、灰色がかった褐色^{かっしやく}の体色をしており、背、体側、腹部にそれぞれ5個ほどの小さい黒斑点^{ほんてん}がなっています。オスはほお部が大きくふくらみます。川の深みの泥底を生息場所としていますが、いちじるしい水質汚濁には耐えられないようです。本種にはかつてはいろいろな名前がありましたが、今上天皇が皇太子時代にされたご研究で統一されました。

巴川と大谷川放水路の河口から下流域にかけて生息しています。近年本種がかなり多く見られるようになってきたようですが、これは巴川の水質が改善され、川底がきれいになってきたためでしょう。



アカオビシマハゼ

(巴川産/写真・安藤)

体長9cmほどのハゼ科の周縁魚^{しゅうえん}です。尻びれの基底部に赤い線があるのが特徴です。体側に暗色の縦条^{あんしょく じゅうじょう}がありますが、これが薄くてむしろ体側の横斑^{おうはん}の方が目立つ個体も少なくありません。雄は繁殖期に黒色になってこの体側のもようが見えなくなってしまいます。海水の影響の強い河口域のカキが付着するところに多く生息します。繁殖はやはりカキ^{から}の殻の中で行うことが多く、卵はカキ殻の中に産み付けます。

巴川の河口部にみられ、かなり生息数が多い種類です。





ウロハゼ

(清水区大橋川産/写真・秋山)

体長 18cm ほどになるハゼ科の周縁魚^{しゅうえん}です。下あごが上あごよりつき出しています。頭部には、眼から下唇へ向かう黒条^{こくじょう}があり、また眼の下方に2つ

の黒い斑紋^{はんもん}があります。また体側には尾まで5個の黒い大きな斑紋^{たいそく}があります。尾部の斑紋をミッキーマウスに見立てる人もいます。これらは本種と見分ける特徴となっています。本種は下流域が発達した川の河口部の泥底や砂底に生息し、ヒメハゼ、チチブなどとともハゼ釣りの外道^{げどう}として釣れることが多い魚です。図鑑^{ずかん}などには美味と書かれていることもあります。かなり大味です。

巴川では河口部でふつうに見られる魚です。



チワラスポ

(巴川産/写真・大貫)

体長 15cm 未満のハゼ科の周縁魚^{しゅうえん}です。体はウナギ型で細長く、腹びれが吸盤^{きゅうばん}となっているのでハゼ類であることがわかります。背びれも長いですが

1基あるだけです。体色は灰紫色から赤褐色で、口は大きく、外から鋭い歯^{かいししよく}のぞけます。河口域のやわらかい泥の中にもぐって生活しています。泥底でも、泥が固くしまっていたり、ヘドロが堆積したところにはすんでいません。生息条件がこのようにごく限られているため、たくさんある静岡県の川の中でも、本種が生息できる環境をもった川はごく少ないのです。

巴川には本流の河口部のごく狭い干潟^{ひがた}でわずかに生息しています。巴川の水質浄化によって河口の底質も改善されてきたあかしと見ることができます。

クサフグ

(清水区三保産/写真・秋山)

体長 12cm ほどのフグ科の周縁魚^{しゅうえん}です。背部は深緑色で、小さい白点が散らばっています。胸びれ近くには黒い斑紋^{はんもん}がありますが、これに白いふちど



りがありません。河口域から沿岸域に広く分布する海水魚で、川の中にも良く侵入します。繁殖期は初夏。大潮の夜に大集団で海岸の浅瀬に乗り上げて行う産卵行動は、テレビや新聞などでも良く取りあげられるにぎやかなものです。釣りでよくつれますが、全身に毒があって食用にはできません。

巴川水系では巴川と大谷川放水路の河口から下流域にかけて見られますが、川の水温が高いときには意外に上流まで入り込みます。

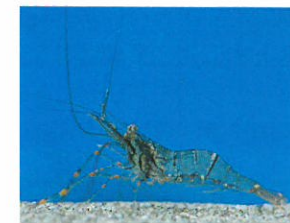
イソスジエビ (上) スジエビモドキ (下)

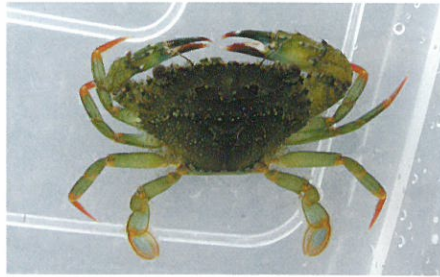
(巴川産/写真・安藤)



河口域に生息する体長 4~5cm のテナガエビ科スジエビ類に属するエビです。両種とも頭胸甲^{とうきょうこう}や腹部背面に赤褐色^{せつかっしょく}のすじがあります。イソスジエビとスジエビモドキではもようの複雑さがちがいで、イソスジエビの方が複雑です。またともに海水の影響のあるところに生息し、あまり川の奥深くには入らない種で、スジエビよりも少し小型です。スジエビと同様に食用となるほか、釣りの餌^{えさ}としても重宝されています。

巴川や大谷川放水路の河口部に生息しています。





ミナミベニツケガニ

(巴川産/写真・板井)

甲らの幅が7cmほどになる南方系のワタリガニ科のカニです。最後部の脚は泳ぎ脚になっています。河口などの汽水域にすみ、泥底や石の下などで

見られます。琉球列島以南がおもな生息地で、マングローブが茂る湿地に多いカニです。本州では和歌山県や静岡県^{ひがた}の浜名湖などが記録されています。静岡県^{がら}の河口域に見られるワタリガニ科のカニとしては、ほかにイシガニやジャノメガザミなどがあります。

巴川では河口域の干潟のカキ殻の多いところで見つかりました。黒潮に乗ってたどりつき、すみついたと思われませんが、繁殖しているかどうかは不明です。



チチュウカイミドリガニ

(巴川産/写真・板井)

甲らの幅が4cm(雌)~7cm(雄)ほどのワタリガニ科のカニです。ワタリガニ科に属しながら最後部の脚は泳ぎ脚になっていません。本種は地中海

原産で1984年に東京湾で初めて記録され、東京湾ではすでに定着が確認されています。相模湾、大阪湾、浜名湖、伊勢湾などでも見つっていますが、海上交通の多い水域での発見が多いようです。船を安定させるために船底に入れるプラスチック水によって運ばれたと考えられています。なお、東京湾などのものは近縁種^{きんえんしゆ}ヨーロッパミドリガニとの雑種の可能性も指摘されています。

巴川では河口部で平成16、17年と続けて発見されました。

巴川水系の魚とその生息場所① (巴川・山原川・大沢川・塩田川)

●は採集により確認された在来種、▲は記録による在来種、○は採集により確認された移殖種、△は記録による移殖種、●は回遊魚の移動経路。

	巴川				山原川			大沢川			塩田川		
	河口	下流	中流	上流	下流	中流	上流	下流	中流	上流	下流	中流	上流
サッパ	●												
イセゴイ	●	●											
ウナギ	●	●						●	●		●		
マアナゴ	▲												
アユ	●	●	●					●	●				
ニジマス													
アマゴ							△						
カワムツ			○					○	○				
ヌマムツ		○	○										
オイカワ		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
カワバタモロコ		△											
ウグイ		●						●					
アブラハヤ		●	●					●			●	●	
タカハヤ				●			●			●	●	●	●
ソウギョ		△											
タモロコ			○										
モツゴ		●	●		●			●			●	●	
カマツカ		○	○										
コイ		●	●		●			●	●				
キンギョ					○								
キンブナ		△											
ゲンゴロウブナ		○			○			○	○				
ギンブナ		●	●		●			●	●		●	●	
タイリクバラタナゴ		○	○		○			○	○				
ドジョウ		●	●					●			●	●	
シマドジョウ			●					●			●	●	
スジシマドジョウの一種								○					
ホトケドジョウ													
ナマズ		●						●					
ゴンズイ	●												
メダカ		○	○					○					○
カタヤシ	○	○											
ガンテンイシヨウジ	●												
ボラ	●	●	●					●	●				
セスジボラ	●												
メナダ	●												
コボラ													
カムルチー		○	○										
スズキ		●											
オオクチバス		○			○								
ブルーギル		○						○					
ギンガメアジ													

巴川水系の魚とその生息場所② (吉田川・長尾川・大谷川放水路・浅畑川 麻機の小川・麻機遊水地・各地ため池)

●は採集により確認された在来種、▲は記録による在来種、○は採集により確認された移殖種、
△は記録による移殖種、●は回遊魚の移動経路。

	巴川				山原川			大沢川			塩田川		
	河口	下流	中流	上流	下流	中流	上流	下流	中流	上流	下流	中流	上流
ヒイラギ	●	●											
シマイサキ	●	●											
コトヒキ	●	●											
クロダイ	▲												
キチヌ	●												
メジナ	●												
ダイナンギンボ	●												
イダテンギンボ	●												
ナベカ	●												
ネズミゴチ													
オカメハゼ	●	●											
カワアナゴ	●	●								●			
テンジクカワアナゴ													
チチブモドキ	●	●											
サツキハゼ	●												
クロコハゼ	●												
ヒメハゼ	●	●											
クロミナミハゼ													
タネハゼ	●												
アベハゼ	●	●						●					
ヒナハゼ	●	●											
ゴクラクハゼ	●	●								●			
シマヨシノボリ	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
ルリヨシノボリ					●	●	●						
オオヨシノボリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
トウヨシノボリ池沼型		●	●					●					
カワヨシノボリ													
チチブ	●	●											
ヌマチチブ	●	●	●					●	●	●			
アカオビシマハゼ	●												
クモハゼ	●												
ウロハゼ	●												
ウキゴリ													
スミウキゴリ	●	●						●	●	●			
マハゼ	●	●						●			●		
アシシロハゼ	●												
ミミズハゼ	●	●											
ボウズハゼ	●	●											
チワラスボ	●												
ハオコゼ	●												
アユカケ													
クサフグ	●												

	吉田川			長尾川			大谷川放水路		浅畑川			麻機の 小川	麻機 遊水地	各地 ため池
	下流	中流	上流	(下流)	中流	上流	河口	下流	下流	中流	上流			
サッパ														
イセゴイ							●	●						
ウナギ							●	●						▲
マアナゴ														
アユ					●	●	●	●						
ニジマス						△								
アマゴ		○	○		●/○	●/○								
カワムツ					○	○			○			○		
ヌマムツ									○					
オイカワ	●	●			●			●	●	●	●	●	●	●
カワバタモロコ														
ウグイ														
アブラハヤ					●				●	●		●		●
タカハヤ	●	●	●		●	●		●			●	●		●
ソウギョ														
タモロコ									○					○
モツゴ								●	●	●	●	●	●	●
カマツカ									○	○				
コイ								●/○	●	●		●	●/○	○
キンギョ					○									
キンブナ														△
ゲンゴロウブナ									○	○			○	○
ギンブナ					●			●	●	●	●	●	●	●
タイリクバラタナゴ								○	○	○	○	○	○	○
ドジョウ		●			●				●	●	●	●	●	●
シマドジョウ	●	●	●		●	●		●						
スジマドジョウの一種														
ホトケドジョウ					▲					▲		●		▲
ナマズ										●		●	●	▲
ゴンズイ														
メダカ								●/○	●/○	○	○	○	○	○
カダヤシ										○				
ガンテンイシヨウジ														
ボラ								●	●	●				
セスジボラ								●	●					
メナダ														
コボラ								●						
カムルチー										○			○	
スズキ														
オオクチバス									○	○			○	○
ブルーギル									○	○	○		○	○
ギンガメアジ								●						

●は採集により確認された在来種、▲は記録による在来種、○は採集により確認された移殖種、△は記録による移殖種、●は回遊魚の移動経路。

	吉田川			長尾川			大谷川放水		浅畑川			麻機の 小川	麻機 遊水地	各地 ため池
	下流	中流	上流	(下流)	中流	上流	河口	下流	下流	中流	上流			
ヒイラギ														
シマイサキ							●	●						
コトヒキ							●							
クロダイ														
キチヌ														
メジナ														
ダイナンギンボ														
イダテンギンボ														
ナベカ														
ネズミゴチ							●							
オカメハゼ														
カワアナゴ							●	●						
テンジクカワアナゴ							●	●						
チチブモドキ							●							
サツキハゼ														
クロコハゼ														
ヒメハゼ														
クロミナミハゼ								▲						
タネハゼ														
アベハゼ														
ヒナハゼ							●	●						
ゴクラクハゼ							●	●						
シマヨシノボリ	●	●	●		●		●	●	●					
ルリヨシノボリ	●	●												
オオヨシノボリ	●	●	●		●	●	●	●						
トウヨシノボリ池沼型								●	●	●		●	●	●
カワヨシノボリ		●	●		●	●								
チチブ														
ヌマチチブ							●	●	●					●
アカオビシマハゼ														
クモハゼ														
ウロハゼ														
ウキゴリ							●	●						
スミウキゴリ	●	●					●	●						
マハゼ							●	●	●					
アシシロハゼ							●	●						
ミミズハゼ							●	●						
ボウズハゼ	●	●												
チワラスボ														
ハオコゼ														
アユカケ							●	●						
クサフグ							●							

魚類名索引

*写真付きで紹介した魚類のみ掲載

ア

アカオビシマハゼ …… 63
 アシシロハゼ …… 35
 アブラハヤ …… 22
 アベハゼ …… 62
 アマゴ …… 14
 アメリカザリガニ …… 51
 アユ …… 20
 アユカケ …… 24
 イセゴイ …… 56
 イソスジエビ …… 65
 ウグイ …… 22
 ウナギ …… 28
 ウロハゼ …… 64
 オイカワ …… 21
 オオクチバス …… 50
 オオヨシノボリ …… 15

カ

カダヤシ …… 44
 カマツカ …… 23
 カムルチー …… 31
 カワアナゴ …… 33
 カワニナ …… 18
 カワバタモロコ …… 42
 カワムツ …… 21
 カワヨシノボリ …… 15
 ガンテンイシヨウジ …… 57
 キチス …… 59
 ギンブナ …… 28
 ギンボ類イダテンギンボ …… 60
 ギンボ類ダイナンギンボ …… 60

ギンボ類ナベカ …… 60
 クサフグ …… 65
 クロコハゼ …… 61
 クロダイ …… 59
 クロベンケイガニ …… 45
 ゲンゴロウブナ …… 48
 コイ …… 29
 ゴクラクハゼ …… 34
 コトヒキ …… 58
 ゴンズイ …… 57

サ

サツキハゼ …… 60
 サツバ …… 56
 サワガニ …… 17
 シマイサキ …… 58
 シマドジョウ …… 23
 シマヨシノボリ …… 24
 スクミリンゴガイ …… 52
 スジエビ …… 37
 スジエビモドキ …… 65
 スズキ …… 58
 スミウキゴリ …… 25

タ

タイリクバラタナゴ …… 30
 タカハヤ …… 14
 タネハゼ …… 62
 タモロコ …… 42
 チチブ …… 34
 チチュウカイミドリガニ …… 66
 チワラスボ …… 64

テナガエビ …… 37
 テンジクカワアナゴ …… 33
 トウヨシノボリ池沼型 …… 49
 ドジョウ …… 43

ナ

ナマズ …… 30
 ヌマエビ …… 17
 ヌマチチブ …… 25

ハ

ヒナハゼ …… 63
 ヒメタニシ …… 51
 ヒメハゼ …… 61
 ヒラテテナガエビ …… 26
 ブルーギル …… 49
 ボウズハゼ …… 26
 ホトケドジョウ …… 43
 ボラ …… 32

マ

マシジミ …… 45
 マハゼ …… 35
 ミゾレスマエビ …… 36
 ミナミテナガエビ …… 38
 ミナミベニツケガニ …… 66
 ミミズハゼ …… 36
 メダカ …… 44
 モクズガニ …… 38
 モツゴ …… 48

参考文献

- 板井隆彦著 静岡県の淡水魚類 第一法規出版社・1982
- 増田 修ほか著 かげろう5号 1985
- 松永敏雄著 北街道と巴川 1985
- 静岡淡水魚研究会編 静岡県の川と魚 ざこ10号 1988
- 板井隆彦編著 静岡県 川と海辺のさかな図鑑 静岡新聞社・1989
- 板井隆彦著 ふるさとの自然 中部編(淡水魚類) 静岡県・1989
- 板井隆彦ほか著 静岡県立自然史博物館設立推進協議会編 しずおか自然図鑑 静岡新聞社・2001
- 静岡県自然環境調査委員会編 まもりたい静岡県の野生生物(普及版) 羽衣出版・2004

あなたも参加しませんか 麻機遊水地の自然観察

特定非営利活動法人 麻機湿原を保全する会では、毎年9月上旬に麻機遊水地の自然観察会を開催しています。また小学校の総合学習や各種団体からの要望を受け、昆虫・植物・野鳥・魚類などに詳しい「自然環境レンジャー」を派遣しています。ご希望の方は事務局にご連絡ください。



制作スタッフ

特定非営利活動法人 麻機湿原を保全する会

- 監修 板井隆彦
- 執筆 板井隆彦
- 写真提供 秋山信彦、安藤晴康、飯塚久志、板井隆彦、大塚善弘、大貫貴清、鈴木和喜、伴野正志、増田 修、脇谷量士郎
- 事務局 鈴木和喜

特定非営利活動法人 麻機湿原を保全する会

私たちは麻機遊水地を拠点に「生きものと地域の関わりを大切にした活動や行政とも連携した活動を目指しています。

《主な活動》

- 生きものを大切にした活動
長年、遊水地を拠点に動植物の観察活動をしている会員が中心になって、ヤナギの森づくり、クリーン作戦、遊水地や巴川などの動植物調査を行うなどの活動をしています。
- 地域との関わりを大切にした活動
湿原であったこの地域を開墾し、稲作や伝統漁(柴あげ)など農村文化を育んできた会員たちから、昔の様子を聞いたり、田んぼを復元するなどの活動をしています。
- 自然環境教育への支援活動
生きものや地域の文化に詳しい会員を「自然環境レンジャー」に認定し、小学校の総合学習や町内会の観察会に派遣しています。



麻機遊水地の自然 - シリーズ④巴川の魚類 -

発行：静岡県静岡土木事務所(河川改良課)
〒422-8031 静岡市駿河区有明町2-20
TEL 054-286-9363 FAX 054-286-9398
〈静岡土木事務所ホームページ：ともえ川(ともえランド)〉
<http://doboku.pref.shizuoka.jp/desaki2/shizuoka/>

制作：特定非営利活動法人 麻機湿原を保全する会
事務局 〒420-0961 静岡市葵区北141-1
TEL・FAX 054-247-4905

遊水地利用上の
ご注意



大雨により河川の水位が上昇して水が遊水地に流れ込む危険があると
回転灯  が回ります。また周辺の河川から水が遊水地に流れ込
む直前にはスピーカー  からサイレンが鳴ります。
回転灯が回ったり、サイレンが鳴ったら、危険ですので、すぐに遊水地の
外に出てください。

バスのご利用 (新静岡バス停から)

- 13番のりば (西バスホーム) で
「こども病院・神経医療センター」行
(こども病院線) に乗車
- 16番のりば (西バスホーム) で
「麻機」行または「麻機北」行
(大浜麻機線) に乗車




 New Public Engineering for SHIZUOKA
 いっしょに、未来の地域づくり。
 静岡県土木事務所

麻機遊水地の自然

シリーズ④ 巴川の魚類

静岡県静岡土木事務所